

志はかくあらしを年の暮  
 長松は蕎麥が好きなり煤拂  
 むつかしや何もなき家の煤拂〔承露盤〕  
 煤拂承塵の槍を拭ひけり  
 懇ろに雑炊たくや小夜時雨〔承露盤〕  
 里神樂寒さにふるふ馬鹿の面  
 夜や更ん庭燎に寒き古社  
 客僧の獅嚙付たる火鉢哉〔承露盤〕  
 冬の日や茶色の裏は紺の山  
 冬枯や夕陽多き黄檗寺〔承露盤〕  
 あまた度馬の嘶く吹雪哉  
 嵐して鷹のそれたる枯野哉  
 あら鷹の鶴蹴落すや雪の原  
 竹藪に雉子鳴き立つる鷹野哉  
 なき母の忌日と知るや網代守

静なる殺生なるらし網代守  
 くさめして風引きつらん網代守  
 焚火して居眠りけりな網代守  
 賭にせん命は五文河豚汁〔承露盤〕  
 河豚汁や死んだ夢見る夜もあり  
 悼 亡  
 夕日寒く紫の雲崩れけり〔承露盤〕  
 悼 亡一句  
 亡骸に冷え盡したる媛甫哉〔承露盤〕  
 あんかうや孕み女の釣るし斬り  
 あんかうは釣るす魚なり繩簾  
 此頃は女にもあり薬喰  
 薬喰夫より餅に取りかゝる  
 落付や疝氣も一夜薬喰  
 乾鮭と竝ぶや壁の棕梠簾



魚河岸や乾鮭洗ふ水の音  
 本來の面目如何雪達磨  
 仲仙道夜汽車に上る寒さ哉  
 西行の白狀したる寒さ哉  
 温泉をぬるみ出るに知らぬ寒さ哉  
 ！本堂は十八間の寒さ哉〔家露警〕  
 愚陀佛は主人の名なり冬籠〔家露警〕  
 情けにはごと味噌贈れ冬籠  
 多籠り小猫も無事で罷りある  
 すべり今年もよき頭の出たりさに頭出るなり紙衾  
 兩肩を襦袢につゝむ衾哉  
 合の宿御白い臭き衾哉  
 水仙に緞子は晴れの衾哉  
 大政 愚陀稿

正岡子規へ送りたる句稿 その八 十二月十四日  
 定に入る僧まだ死なす冬の月  
 幼帝の御運も今や冬の月  
 寒月やから堀端のうどん賣  
 ！寒月や薙刀かざす荒法師  
 寒垢離や王事鹽きなしと聞きつれど  
 繪にかくや昔男の節季候  
 水仙は屋根の上なり煤拂  
 寐て聞くやべたりくと餅の音  
 餅搗や小首かたげし鶏の面  
 衣脱だ帝もあるに火燧哉  
 君が代や年々に減る厄拂  
 勢ひやひしめく江戸の年の市  
 是見よと松提げ歸る年の市  
 行年や刹那を急ぐ水の音



行年や實盛ならぬ白髮武者  
 春待つや云へらく無事は是貴人  
 年忘れ腹は中々切りにくき  
 屑買に此髭賣らん大晦日  
 穢多寺へ嫁ぐ憐れや年の暮  
 白馬遅々たり冬の日薄き砂堤〔承露盤〕  
 山陰に熊笹寒し水の音〔承露盤〕  
 初冬や竹切る山の鉦の音〔承露盤〕  
 冬枯れて山の一角竹青し〔承露盤〕  
 炭焼の斧振り上ぐる嵐哉〔承露盤〕  
 冬木立寺に蛇骨を傳へけり〔承露盤〕  
 碧潭に木の葉の沈む寒哉  
 岩にたゞ果敢なき蠅の思ひ哉〔承露盤〕  
 炭竈に葛這ひ上る枯れながら〔承露盤〕  
 炭賣の鷹括し來る城下哉〔承露盤〕

一時雨此山門に偈をかゝん  
 五六寸去年と今年の落葉哉  
 水仙白く古道顔色を照らしけり  
 冬籠り黄表紙あるは赤表紙  
 禪寺や丹田からき納豆汁〔承露盤〕  
 東西南北より吹雪哉  
 家も捨て世も捨てけるに吹雪哉  
 圓福寺新田義宗脇屋義治二公の遺物を觀る 二句  
 つめたくも南蠻鐵の具足哉  
 山寺に太刀を頂く時雨哉  
 日浦山二公の墓に謁す 二句  
 塚一つ大根畠の廣さ哉  
 應永の昔しなりけり塚の霜〔承露盤〕  
 湧が淵三好秀保大蛇を斬るところ  
 蛇を斬つた岩と聞けば淵寒し



大政

愚陀拜

正岡子規へ送りたる句稿 その九 十二月十八日

飯櫃を蒲團につゝむ婦哉  
 煨芋を頭巾に受くる和尚哉  
 盗人の眼ばかり光る頭巾哉  
 辻番の捕へて見たる頭巾哉  
 頭巾きてゆり落しけり竹の雪  
 さめやらで追手のかゝる蒲團哉  
 毛蒲團に君は目出度寐顔かな  
 薄き事十年あはれ三布蒲團  
 片々や犬盗みたるわらじ足袋  
 羽二重の足袋めしますや嫁が君  
 雪の日や火燧をすべる土佐日記  
 應々と取次に出ぬ火燧哉

埋火や南京茶碗鹽煎餅  
 埋火に鼠の糞の落ちにけり  
 曉の埋火消ゆる寒さ哉  
 門閉ぢぬ客なき寺の冬構  
 冬籠米搗く音の幽かなり〔茶露盤〕  
 砂濱や心元なき冬構〔茶露盤〕  
 銅瓶に菊枯るゝ夜の寒哉  
 五つ紋それはいかめし桐火桶  
 冷たくてやがて恐ろし瀬戸火鉢  
 親展の状燃え上る火鉢哉  
 默然と火鉢の灰をならしけり  
 なき母の湯婆やさめて十二年〔茶露盤〕  
 湯婆とは伴のつけし名なるべし  
 風吹くや下京邊の綿帽子  
 清水や石段上る綿帽子



綿帽子面は成程白からず  
爐開きや佛間に隣る四疊半  
爐開きに道也の釜を贈りけり  
口切や南天の實の赤き頃  
口切にこはけしからぬ放屁哉  
吾妹子を客に口切る夕哉  
花嫁の喰はぬといひし亥の子哉  
到來の亥の子を見れば黄な粉なり  
水臭し時雨に濡れし亥の子餅  
枯ながら蔦の水れる岩哉  
湖は氷の上の焚火哉  
瘦馬に山路危き氷哉  
筆の毛の水一滴を氷りけり  
井戸繩の氷りて切れし朝哉  
雁の拍子ぬけたる氷哉

枯蘆の二十日流れぬ氷哉  
水仙の葉はつれなくも氷哉  
凧に牛怒りたる繩手哉  
冬ざれや青きもの只菜大根  
山路来て馬やり過す小春哉  
橋朽ちて冬川枯るゝ月夜哉  
範頼の墓に謁して二句  
蒲殿の愈悲し枯尾花〔家露筆〕  
凧や冠者の墓撲つ落松葉  
山寺や冬の日残る海の上〔家露筆〕  
古池や首塚ありて時雨ふる  
穴蛇の穴を出でたる小春哉  
空木の根あらはなり冬の川  
納豆を檀家へ配る師走哉  
親の名に納豆賣る兒の憐れさよ



からつくや風に吹かれし納豆賣  
榎の火や昨日碓氷を越え申した  
梁山泊毛脛の多き榎火哉  
裏表濡れた衣干す榎火哉  
積雪や血痕絶えて虎の穴  
大政

今度のはなくしてはいやであります悪句には△か□の符號をつけ玉へ

愚陀佛稿

正岡家所藏『承露盤』の中より 四十三句

鶯の大木に來て初音かな  
春三日よしのゝ櫻一重なり  
雛殿も語らせ給へ宵の雨  
陽炎の落ちつきかねて草の上  
馬の息山吹散て馬士もなし

辻駕籠に朱鞘の出たる柳哉  
春の雨あるは順禮古手買  
尼寺や彼岸櫻は散りやすき  
叩かれて晝の蚊を吐く木魚哉  
馬子歌や小夜の中山さみだるゝ  
あら瀧や満山の若葉皆震ふ  
夕立や蟹はひ上る簀子椽  
明け易き夜ちやもの御前時鳥  
△尼寺や芥子ほろくと普門品  
鐘つけば銀杏ちるゝ建長寺  
白露や芙蓉したゝる音すなり  
長き夜を只蠟燭の流れけり  
乗りながら馬の糞する野菊哉  
馬に二人霧を出でたり鈴の音  
泥龜の流れ出でたり落し水

〔海南新聞 九月六日〕

〔同前〕

〔同前 九月七日〕

〔同前 九月八日〕

〔同前 九月十日〕

〔同前 九月十一日〕

Handwritten notes in cursive script, including the characters '尼寺' and '普門品'.



影 参 差 松 三 本 の 月 夜 哉  
 う て や 砧 こ れ は 都 の 詩 人 な り 〔海南新聞 九月十三日〕  
 明 け 易 き 七 日 の 夜 を 朝 寐 哉 〔同前 九月十四日〕  
 秋 の 蟬 死 度 も な き 聲 音 哉 〔同前 九月十五日〕  
 柳 散 る 片 側 町 や 水 の 音 〔同前 九月十七日〕  
 稻 妻 や 折 々 見 ゆ る 瀧 の 底 〔同前 九月二十一日〕  
 親 一 人 子 一 人 盆 の あ は れ な り 〔同前 九月二十二日〕  
 夕 月 や 野 川 を わ た る 人 は 誰 〔同前 九月二十六日〕  
 掛 稻 や 澁 柿 た る 門 構  
 我 宿 の 柿 熟 し た り 鳥 來 た り  
 野 分 し て 朝 鳥 早 く 立 ち け ら し  
 日 の 入 や 秋 風 遠 く 鳴 つ て 來 る  
 曼 珠 沙 花 あ つ け ら か ん と 道 の 端  
 は ら く と せ う 事 な し に 萩 の 露  
 史 官 啓 す 雀 蛤 と は な り に け り

行 年 や 佛 も も と は 凡 夫 な り  
 鷺 地 に 風 吹 く や 鳩 の 湖  
 大 粒 な 霰 に あ ひ ぬ う つ の 山  
 十 月 の し ぐ れ て 文 も 参 ら せ ず  
 い そ が し や 霰 ふ る 夜 の 鉢 叩  
 十 月 の 月 や や う く 凄 く な る  
 山 茶 花 の 垣 一 重 な り 法 華 寺  
 行 く 年 や 膝 と 膝 と を つ き 合 せ

送子規

此 夕 野 分 に 向 い て わ か れ け り

送子規

御 立 ち や る か 御 立 ち や れ 新 酒 菊 の 花



子規を送る 二句

秋の雲たゞむら／＼と別れかな  
見つゝ往け旅に病むとも秋の富士

土堤一里常盤木もなしに冬木立

雪深し出家を宿し参らする

明治二十八年?

明治二十九年

一月十二日正岡子規宛の端書の中より

東風や吹く待つとし聞かば今歸り來ん

正岡子規へ送りたる句稿 その十 一月二十八日

此土手で追ひ剥がれし〔承露盤〕初櫻  
風に早鐘つくや増上寺〔承露盤〕  
谷の家竹法螺の音に時雨けり〔承露盤〕  
牙返る頤を御厭ひなさるべし〔承露盤〕  
出代りや花と答へて跛なり〔承露盤〕  
雪霽たり竹婆娑く〔承露盤〕と跳返る〔承露盤〕  
水青し土橋の上〔承露盤〕に積る雪  
若菜摘む人とは如何に音をば泣く



花に暮れて由ある人にはぐれけり  
見て行くやつばらくに寒の梅  
静かさは竹折る雪に寐かねたり  
武藏野を横に降る冬雨  
太箸を抛げて笠着る別れ哉  
いざや我虎穴に入らん雪の朝  
絶頂に敵の城あり玉霞  
御天守の鯨いかめしき霞かな  
一つ家のひそかに雪に埋れけり  
春大震塔も擬寶珠もねぢれけり  
疝氣持雪にころんで哀れなり  
天と地の打ち解けりな初霞  
吳竹の垣の破目や梅の花  
御車を返させ玉ふ櫻かな  
掃溜や錯落として梅の影

〔家露整〕

永き日や章陀を講ずる博士あり  
日は永し三十三間堂長し  
素琴あり窓に横ふ梅の影  
永き日を順禮渡る瀬田の橋  
鶴獲たり月夜に梅を植ん哉  
錦帯の擬寶珠の數や春の川  
里の子の草鞋かけ行く梅の枝  
紅梅に青葉の笛を畫かばや  
紅梅にあはれ琴ひく妹もがな  
源藏の徳利をかくす吹雪哉  
したゝかに饅頭笠の霞哉  
冬の雨柿の合羽のわびしさよ  
下馬札の一つ立ちけり冬の雨

展先妣墓一句

梅の花不肖なれども梅の花

〔井の哲の事〕〔家露整〕



まさなくも後ろを見する吹雪哉  
氷る戸を得たりや應と明け放し  
吾庵は氷柱も歳を迎へけり

愚陀佛稿

正岡子規へ送りたる句稿 その十一

元日イに生れぬ先の親戀し  
あた元日を餅も食はずに紙衣哉  
山里は割木でわるや鏡餅  
碎けよや玉と答へて鏡餅  
國分寺の瓦堀出す櫻かな  
斷礎一片有明櫻ちりかゝる  
堆き茶殻わびしや春の  
古寺に鱒焼くなり春の  
配所には干網多し春の  
月夜宵

〔承露盤〕

口惜しや男と生れ春の月  
よく聞けば田螺鳴くなり鍋の中  
山吹に里の子見えぬ田螺かな  
白梅に千鳥啼くなり濱の寺  
梅咲て奈良の朝こそ戀しけれ  
消にけりあわたゞしくも春の雪  
春の雪朱盆に載せて惜まるゝ  
居風呂に風ひく夜や冴返る  
頃しもや越路に病んで冴返る  
霞む日や巡禮親子二人なり  
旅人の臺場見て行く霞かな  
漱石

明治二十九年一月二十九日愚陀佛庵小集一題二句

正岡子規へ送りたる句稿 その十二 三月五日



つくばいに散る山茶花の水りけり  
 烏飛んで夕日に動く冬木かな  
 船火事や敷をつくして鳴く千鳥  
 壇築て北斗祭るや夜劍の霜  
 龍寒し繪筆抛つ古法眼  
 つい立の龍蟠まる寒さかな  
 廻廊に吹きこむ海の吹雪かな  
 梁に畫龍の入るにらむ日永かな  
 奈良の春十二神將剝げ盡せり  
 亂山の盡きて原なり春の風  
 都府樓の瓦硯洗ふや春の水  
 門柳五本並んで枝垂れけり  
 若草や水の滴たるる蜺籠  
 月落ちて佛燈青し梅の花  
 春の夜を辻講釋にふかしける

蕭郎の腕環偷むや春の月〔承露盤〕  
 護摩壇に金鈴響く春の雨〔承露盤〕  
 春の夜の御惱平癒の祈禱哉〔承露盤〕  
 鳩の糞春の夕の繪馬白し〔承露盤〕  
 伽羅焚て君を留めてむる朧かな〔承露盤〕  
 辻占のもし君ならば朧月〔承露盤〕  
 蘭燈に詩をかく春の恨み哉〔承露盤〕  
 恐ろしや經を血でかく朧月  
 着衣始め紫衣を給はる僧都あり  
 物草の太郎の上や揚雲雀  
 野を焼けば焼けるなり間の抜ける程  
 涅槃像腹に死なざる本意なさよ  
 春戀し浅妻船に流さるゝ  
 潮風に若君黒し二日灸  
 枸杞の垣田樂焼くは此奥か



春も うし 東樓西家何歌ふ  
 猫知らず寺に飼はれて戀をわたる  
 芹洗ふ藁家の門や温泉をわたの流  
 陽炎に蟹の泡ふく干潟かな  
 さらくと筧竹もむや春の雨  
 日永哉豆に眠がる神の馬  
 古瓢柱に懸けて蜂巢くふ  
 ゆく春や振分髪も肩過ぎぬ  
 御館やまのつらく椿咲にけり  
 二つかと見れば一つに飛ぶや蝶  
 唐人の飴賣見えぬ柳かな  
 刀うつ槌の響や春の風  
 踏はづす蛙是へと田舟哉  
 初蝶や菜の花なくて淋しかる  
 曳船やすり切つて行く蘆の角

敷なれば紅梅咲て女かな  
 紅梅に通ふ築地の崩哉  
 桔槔切れて梅ちる月夜哉  
 濡燕御休みあつて然るべし  
 雉子の聲大竹原を鳴り渡る  
 雨がふる淨瑠璃坂の傀儡師  
 むくくと砂の中より春の水  
 白き砂の吹ては沈む春の水  
 金屏を幾所かきさく猫の戀  
 春に入つて近頃青し鐵行燈  
 朧の夜五右衛門風呂にうなる客  
 永き日や徳山の棒趙州の拂  
 飯食ふてねむがる男畠打つ  
 春風や永井兵助の人だから  
 居合拔けば燕ひらりと身をかはず

〔家露〕



物言はで腹ふくれたる河豚かな  
 憂々と鼓刀の肆に時雨けり  
 枯野原汽車に化けたる狸あり  
 其中に白木の宮や梅の花  
 章魚眠る春潮落ちて岩の間  
 山伏の並ぶ關所や梅の花  
 梅ちるや月夜に廻る水車  
 兵見殿の梅見に御ちやる朱鞘哉  
 酒醒て梅白き夜の牙返る  
 飯館の頭に兵と吹矢かな  
 蟹に負けて飯館の足五本なり  
 梓弓岩を碎けば春の水  
 山路来て梅にすくまる馬上哉  
 若黨や一步さがりて梅の花  
 青石を取り巻く庭の董かな

犬去つてむつくと起る蒲公英が  
 大和路や紀の路へつゞく董草  
 川幅の五尺に足らで董かな  
 三日雨四日梅咲く日誌かな  
 雙六や姉妹向ふ春の宵  
 生海苔のこゝは品川東海寺  
 菜の花の中に糞ひる飛脚哉  
 菜の花や門前の小僧經を讀む  
 菜の花を通り抜ければ城下かな  
 海見ゆれど中々長き菜畑哉  
 海見えて行けどもく菜畑哉  
 麥二寸あるは又四五寸の旅路哉  
 筵帆の眞上に鳴くや揚雲雀  
 風船にとまりて見たる雲雀哉  
 落つるなり天に向つて揚雲雀

〔承露堂〕



雨晴れて南山春の雲を吐く  
むづからせ給はぬ雛の育ち哉  
去年今年大きうなりて歸る雁  
一群や北能州へ歸る雁  
爪下り海に入日の茶畑哉  
里の子の猫加へけり涅槃像  
鶯のほうと許りで失せにけり  
鶯や雨少し降りて衣紋坂  
鶯の去れども貧にやつれけり  
鶯や田圃の中の赤鳥居  
鶯をまた聞きまする畫餉哉

古白一週忌

君歸らず何處の花を見にいたか

正岡子規へ送りたる句稿 その十三

三日月や野は穢多村へ焼て行く  
舊道や焼野の匂ひ笠の雨  
春日野は牛の糞まで焼てけり  
宵々の窓ほのあかし山焼く火  
野に山に焼き立てられて雉の聲  
野を焼くや道標焦る官有地  
篠竹の垣を隔て、焼野哉  
村と村川を隔て、焼野哉  
蝶に思ふいつ振袖で嫁ぐべき  
老ぬるを蝶に背いて繰る糸や  
御簾揺れて蝶御覽すらん人の影  
蝶舐る朱硯の水澱みたり  
藏つきたり紅梅の枝黒い屏  
山三里櫻に足駄穿きながら



花を活けて京音の寡婦なまめかし  
鶯や隣あり主人垣を覗く  
連立て歸うと雁皆去りぬ  
齒ぎしりの下婢恐ろしや春の宵  
太刀佩くと夢みて春の晨哉  
鳴く事を鶯思ひ立つ日哉  
吾妹子に揺り起されつ春の雨  
普化寺に犬逃げ込むや梅の花  
紅梅は愛せず折て人に呉れぬ  
花に來たり瑟を鼓するに意ある人  
禿いふわしや煩ふて花の春  
きぬくの鐘につれなく牙え返る  
虚無僧の敵這入ぬ梅の門

正岡子規へ送りたる句稿 その十四 三月二十四日

先達の斗巾の上や落椿  
御陵や七つ下りの落椿  
金平のくるりくと鳳巾  
舟輕し水皺よつて蘆の角  
齊摘んで母なき子なり一つ家  
種卸しく婚と舅かな  
鶯の鳴かんともせず枝移り  
仰向て深編笠の花見哉  
女らしき虚無僧見たり山櫻  
奈古寺や七重山吹八重櫻  
春の江の開いて遠し寺の塔  
柳垂れて江は南に流れけり  
川向ひ櫻咲きけり今土燒  
頼もうと竹庵來たり梅の花  
雨に濡れて鶯鳴かぬ處なし

〔家露註〕



居士一驚を喫し得たり江南の梅一時に開く  
 手習や天地玄黄梅の花  
(後)いろはにほへと  
 霞むのは高い松なり國境  
 奈良七重菜の花つゞき五形咲く  
 草山や南をけづり麥畑〔承露堂〕  
 御簾揺れて人ありや否や飛ぶ胡蝶  
 端然と戀をして居る雛かな  
 藤の花本妻尼になりすます  
 待つ宵の夢ともならず梨の花  
 春風や吉田通れば二階から  
 風が吹く幕の御紋は下り藤  
 花賣は一軒置いて隣りなり  
 登りたる凌雲閣の霞かな  
 思ひ出すは古白と申す春の人〔承露堂〕  
 山城や乾にあたり春の水〔承露堂〕

夫子暖かに無用の肱を曲げてねる  
 家あり一つ春風春水の真中に  
 模糊として竹動きけり春の山  
 限りなき春の風なり馬の上〔承露堂〕  
 乙鳥や赤い暖簾の松坂屋  
 古ぼけた江戸錦繪や春の雨  
 蹴爪づく富士の裾野や木瓜の花  
 臙故に行衛も知らぬ戀をする  
 春の海に橋を懸けたり五大堂〔承露堂〕  
 足弱を馬に乗せたり山櫻〔承露堂〕

神仙體 十句 三月『めさまし草』  
 春の夜の琵琶聞えけり天女の祠  
 路も無し綺樓傑閣梅の花  
 屋の棟や春風鳴つて白羽の矢



蛤やをりく見ゆる海の城  
霞たつて朱ぬりの橋の消えにけり  
どこやらで我名よぶなり春の山  
大空や霞の中の鯨波の聲  
行春や瓊觴山を流れ出る  
神の住む春山白き雲を吐く  
催馬樂や縹緲として島一つ

松山客中虚子に別れて 四月

永き日や欠伸うつして別れ行く

留 別 村上露月に 四月

逢はで去る花に涙を濺げかし

四月『めさまし草』二句

尾上より風かすみけり燈灘  
窓低し茶の花明り夕曇り

五月『めさまし草』

駄馬つゞく阿蘇街道の若葉かな

六月十一日正岡子規宛の手紙の中より

衣更へて京より嫁を貰ひけり

正岡子規へ送りたる句稿 その十五 七月八日

海嘯去つて後すさましや五月雨  
かたまるや散るや螢の川の上  
一つすうと座敷を抜る螢かな  
竹四五竿をりく光る螢かな  
うき世いかに坊主となりて晝寐する  
〔承露堂〕



さもあらばあれ時鳥啼て行く  
禪定の僧を圍んで鳴く蚊かな  
うき人の顔そむけたる蚊遣かな  
筋違に芭蕉渡るや蝸牛  
袖に手を入れて反りたる袷かな  
短夜の芭蕉は伸びて仕まひけり  
もう寐すばなるまいなそれも夏の月  
短夜の夢思ひ出すひまもなし  
佛壇に尻を向けたる團扇かな  
ある畫師の扇子捨てたる流かな  
貧しさは紙帳ほどなる庵かな  
午砲打つ地域の上や雲の峯  
黒船の瀬戸に入りけり雲の峯  
行軍の喇叭の音や雲の峯  
二里下る麓の村や雲の峯

〔承露堂〕

涼しさの闇を來るなり須磨の浦  
涼しさの目に餘りけり千松島  
袖腕に威丈高なる暑かな  
錢湯に客のいさかふ暑かな  
かざすだに面はゆげなる扇子哉  
涼しさや大釣鐘を抱て居る  
夕立の湖に落ち込む勢かな  
涼しさや山を登れば岩谷寺  
吹井戸やぼこり／＼と眞桑瓜  
涼しさや水干着たる白拍子  
ゑいやつと蠅叩きけり書生部屋  
吾老いぬとは申すまじ更衣  
異人住む赤い煉瓦や棕櫚の花  
敷石や一丁つゞく棕櫚の花  
獨居の歸ればむつと鳴く蚊哉



尻に敷て笠忘れたる清水哉  
据風呂の中はしたなや柿の花  
短夜を君と寐ようか二千石とらうか  
祖母様の 大振袖 や土用干  
玉章 や袖裏返す 土用干 〔家露警〕  
愚陀拜

正岡子規へ送りたる句稿 その十六 八月  
すゞしさをや裏は鉦うつ光琳寺  
涼しさをや門にかけたる橋斜め  
眠らじな蚊帳に月のさす時は 〔家露警〕  
國の名を知つておぢやるか時鳥  
西の對へ渡らせ給ふ葵かな  
涼々と笈の音のすゞしさを  
橋や通るは近衛大納言

朝貌の黄なるが咲くと申し來ぬ  
紅白の蓮揺鉢に開きけり 〔家露警〕  
涼しさや奈良の大佛腹の中  
淋しくもまた夕顔のさかりかな  
あつきものむかし大坂夏御陣  
夕日さす裏は磧のあつさかな  
午時の草もゆるがす照る日かな  
琵琶の名は青山とこそ時鳥  
就中大なるが支那の團扇にて  
くらがり に團扇の音や古槐  
夏瘦せて日に焦けて雲水の果はいかに  
床に達磨芭蕉涼しく吹かせけり  
百日紅浮世は熱きものと知りぬ  
手をやらぬ朝貌のびて哀なり  
絹團扇墨畫の竹をかゝんかな



獨身や髭を生して夏に籠る  
夏書すとて一筆しめし参らす  
なんのその南瓜の花も咲けばこそ  
我も人も白きもの着る涼みかな  
物や思ふと人の間ふまで夏瘦せぬ  
満潮や涼んで居れば月が出る  
大慈寺の山門長き青田かな  
唐茄子と名にうたはれて窺みけり

愚陀拜

正岡子規へ送りたる句稿 その十七 九月二十五日

博多公園

初秋の千本の松動きけり

箱崎八幡

鼓はゆき露にぬれたる鳥居哉

香椎宮

秋立つや千早古る世の杉ありて

天拜山

見上げたる尾の上に秋の松高し

太宰府天神

反橋の小さく見ゆる芙蓉哉

観世音寺

古りけりな道風の額秋の風

都府樓

鳴立つや礎残る事五十

二日市温泉

温泉の町や踊ると見えてさんざめく

梅林寺

碧巖を提唱す山内の夜ぞ長き

船後屋温泉



ひや／＼と雲が来るゝ温泉の二階 〔承露盤〕

都府樓瓦を達磨の前に置きて

玉か石か瓦かあるは秋風か

内君の病を看護して一句

枕邊や星別れんとする晨 〔承露盤〕

稻妻に行手の見えぬ廣野かな 〔承露盤〕

秋風や京の寺々鐘を撞く

明月や琵琶を抱へて弾きもやらず

廻廊の柱の影や海の月 〔承露盤〕

明月や丸きは僧の影法師 〔承露盤〕

酒なくて詩なくて月の静かさよ 〔承露盤〕

明月や背戸で米搗く作右衛門

明月や浪華に住んで橋多し 〔承露盤〕

引かで鳴る夜の鳴子の淋しさよ 〔承露盤〕

無性なる案山子朽ちけり立ちながら

打てばひゞく百戸餘りの砧哉

衣擣つて郎に贈らん小包で

鮎澁ぬ降り込められし山里に

鱸魚肥えたり樓に登れば風が吹く

白壁や北に向ひて桐一葉

柳ちりりて長安は秋の都かな

垂れかゝる萩静かなり背戸の川

落ち延びて只一騎なり萩の原 〔承露盤〕

蘭の香や聖教帖を習はんか 〔承露盤〕

後に鳴き又先に鳴き鶉かな 〔承露盤〕

窓をあけて君に見せうす菊の花 〔承露盤〕

作らねど菊咲にけり折りにけり 〔承露盤〕

世は貧し夕日破垣鳥瓜

鶏頭や代官殿に御意得たし 〔承露盤〕

長けれど何の糸瓜とさがりけり 〔承露盤〕



禪寺や芭蕉葉上愁雨なし  
無雜作に葛這上る廁かな  
佛には白菊をこそ参らせん

愚陀

名月や十三圓の家に住む  
月東君は今頃寐て居るか

九月二十五日正岡子規宛の手紙の中より 二句

〔承露盤〕

正岡子規へ送りたる句稿 その十八 十月

行く秋をすうとほうけし薄哉  
行く秋の犬の面こそけんなれ  
緋袍を誰か贈ると秋暮れぬ  
祭文や小春治兵衛に暮るゝ秋  
僧堂で瘦せたる我に秋暮れぬ

行秋や此頃参る京の替女  
行秋を踏張て居る仁王哉  
行秋や博多の帯の解け易き  
機を織る嬬二十で行く秋や  
行く秋やふらりと長き草鞋の緒  
日の入や五重の塔に残る秋  
行く秋や椽にさし込む日は斜  
山は残山水は剩水にして残る秋  
愚陀拜  
原廣し吾門前の星月夜  
〔承露盤〕  
新らしき蕎麥打て食はん坊の雨  
憶古白  
古白とは秋につけたる名なるべし  
〔承露盤〕

正岡子規へ送りたる句稿 その十九 十月



初戀

今年より夏書せんとぞ思ひ立つ  
獨り顔を團扇でかくす不審なり

逢戀

降る雪よ今宵ばかりは積れかし  
思ひきや花にやせたる御姿  
影法師月に竝んで静かなり

別戀

きぬくや裏の篠原露多し  
見送るや春の潮のひた／＼に

忍戀

人に言へぬ願の糸の亂れかな  
君が名や硯に書いては洗ひ消す

絶戀

橋落ちて戀中絶えぬ五月雨

忘れしか知らぬ顔して畠打つ

恨戀

行春を琴掻き鳴らし掻き亂す  
五月雨や鏡曇りて恨めしき

死戀

生れ代るも物憂からましわすれ草  
化石して強面なくならう朧月

正岡子規へ送りたる句稿 その二十 十一月

藻ある底に魚の影さす秋の水  
秋の山松明かに入日かな  
秋の日中山を越す山に松ばかり  
一人出て粟刈る里や夕焼す  
配達のものぞいて行くや秋の水  
秋行くと山僮窓を排しいふ



秋の蠅握つて而して放したり  
生憎や嫁瓶を破る秋の暮  
攝待や御僧は柿をいくつ喰ふ  
馬盥や水烟して朝寒し

訪隠者一句

菊咲て通る路なく逢はざりき  
空に一片秋の雲行く見る一人  
秋高し吾白雲に乗らんと思ふ  
野分して一人障子を張る男  
御名残の新酒とならば戴かん  
菊活けて内君轉た得意なり

悼亡一句

見えざりき作りし菊の散るべくも  
肌寒や膝を崩さず坐るべく  
僧に對すうそ寒げなる拂子の尾〔承露盤〕

善男子善女子に寺の菊黄なり〔承露盤〕  
盛り崩す基石の音の夜寒し  
壁の穴風を引くべく稍寒し  
蟻螂のさりとては又推參な  
此里や柿澁からず夫子住む〔承露盤〕  
初冬や向上の一路未だ開かず  
冬來たり袖手して書を傍觀す  
初冬を刻むや烈士喜劍の碑  
初冬の琴面白の音じめ哉  
漱石拜

叱正

正岡子規へ送りたる句稿 その二十一 十二月

風や海に夕日を吹き落す  
吾栽し竹に時雨を聴く夜哉  
ばちくと枯葉焚くなり薬師堂



浪人の寒菊咲きぬ具足櫃  
謡ふべき程は時雨つ羅生門  
折り焚き<sup>て</sup>時雨に弾かん琵琶もなし  
銀屏を後ろにしたり水仙花  
水仙や主人唐めく秦の姓  
水仙や根岸に住んで薄氷  
村長の羽織短かき寒哉  
革羽織古めかしたる寒かな  
風の松はねぢれつ岡の上  
野を行けば寒がる吾を風が吹く  
策つて風の中に馬のり入るゝ  
夕日逐ふ乗合馬車の寒かな  
雪ながら書院あけたる牡丹哉  
堅炭の形ちくづさぬ行衛哉  
雑炊や古き茶椀に冬籠

鼓うつや能樂堂の秋の水  
重なるは親子か雨に鳴く鶉  
底見ゆる一枚岩や秋の水  
行年を家賃上げたり麴町  
行年を妻炊ぎけり粟の飯  
器械湯の石炭臭しむら時雨  
酔て叩く門や師走の月の影  
貧にして住持去るなり石路の花  
博徒市に闘ふあとや二更の冬の月  
しぐれ候程に宿につきて候  
累々と徳孤ならずの蜜柑哉  
同化して黄色にならう蜜柑島  
日あたりや熟柿の如き心地あり  
大將は五枚しころの寒さかな  
山勢の蜀につらなる小春かな



かきならす灰の中より木の葉哉  
汽車を逐て煙這行枯野哉  
紡績の笛が鳴るなり冬の雨  
がさくくと紙衣振へば霰かな  
挨拶や鬚の中より出る霰  
かたまつて野武士落行枯野哉

魏叔子大鐵椎傳 一句

星飛ぶや枯野に動く椎の影  
鳥一つ吹き返さるゝ枯野かな  
さらくくと栗の落葉や鵲の聲  
空家やつくばひ氷る石路の花  
飛石に客すべる音す石路の花  
吉良殿のうたれぬ江戸は雪の中  
覺めて見れば客眠りけり爐のわきに  
面白し雪の中より出る蘇鐵

寐る門を初雪ちやとて叩きけり  
雪になつて用なきわれに合羽あり  
僧俗の差し向ひたる火桶哉  
六波羅へ召れて寒き火桶哉  
物語る手創や古りし桐火桶  
生垣の上より語る小春かな  
小春半時野川を隔て語りけり  
居眠るや黄雀堂に入る小春  
家富んで窓に小春の日陰かな  
白旗の源氏や木曾の冬木立  
立籠る上田の城や冬木立  
枯残るは尾花なるべし一つ家  
時雨るゝは平家につらし五家莊  
藁葺をまづ時雨けり下根岸  
堂下潭あり潭裏影あり冬の月



漱石拜

正岡家所藏『承露盤』の中より 十二句

曉の夢かと思ふ臃哉  
 干網に立つ陽炎の腥き  
 時鳥馬追ひこむや禁川  
 薫風や銀杏三抱あまりなり  
 茂りより二本出て来る笈哉  
 亭寂寞薊鬼百合なんど咲く  
 うつむいて膝に抱きつく寒哉  
 半鐘と並んで高き冬木哉  
 茶煙禪榻外は師走の日影哉  
 雪洞の廊下をさがる寒さ哉  
 水涸れて轍のあとや冬の川  
 土手枯れて左右に長き笈哉

十二月『めさまし草』二句

扶けられて驢背危し雪の客  
 戸を開けて驚く雪の辰かな

明治二十九年頃

どつしりと尻を据えたる南瓜かな  
 (第十三卷五八〇頁参照)



明治三十年

正岡子規へ送りたる句稿 その二十二 一月

〔前文略〕

生れ得てわれ御目出度顔の春

其他少々

五斗米を餅にして喰ふ春來たり  
臣老いぬ白髪を染めて君が春  
元日や踊跚として吾思ひ  
馬に乗つて元朝の人勳二等  
詩を書かん君墨を磨れ今朝の春  
元日や吾新たなる願あり  
春寒し印陀羅といふ畫工あり  
聲なる僕薬を打つ冬籠

親子してことりともせず冬籠  
醫はやらす歌など撰し冬籠  
力なや油なくなる冬籠  
佛焚て僧冬籠して居るよ  
燭つきつ墨繪の達磨寒氣なる  
燭きつて曉ちかし大晦日〔承露盤〕  
餅を切る庖丁鈍し古曆〔承露盤〕  
冬籠弟は無口にて候  
桃の花民天子の姓を知らず  
松立て、空ほのく、と明る門  
ふくれしよ今年の腹の栗餅に  
貧といへど酒飲みやすし君が春  
塔五重五階を残し霞みけり

正岡子規へ送りたる句稿 その二十三 二月



酒苦く蒲團薄くて寝られぬ夜  
 ひたくと藻草刈るなり春の水  
 岩を廻る水に浅きを恨む春  
 散るを急ぎ櫻に着んと縫ふ小袖  
 出代の夫婦別れて来りけり  
 人に死し鶴に生れて牙え返る〔承露盤〕  
 隻手此頃比良目生捕る沙干よな  
 恐らくば東風に風ひくべき薄着  
 寒山か拾得か蜂に螫されしは〔承露盤〕  
 ふるひ寄せて白魚崩れん許りなり〔承露盤〕  
 落ちさまに蕨を伏せたる椿哉〔承露盤〕  
 食りて鶯續け様に鳴く  
 のら猫の山寺に来て戀をしつ  
 おつくと大なる田螺の不平哉〔承露盤〕  
 菜の花や城代二萬五千石

明天子上にある野の長閑なる〔承露盤〕  
 大轟や霞の中を行く車  
 烈士劍を磨して陽炎むらくと立つ  
 柳あり江あり南畫に似たる吾  
 或夜夢に雛娶りけり白い酒〔承露盤〕  
 霞みけり物見の松に熊坂が  
 酷熱して三聖撃す桃の花  
 川を隔て牛散點し霞みけり  
 薫するは大内といふ香や春  
 姉様に参らす桃の押繪かな〔承露盤〕  
 よき敵ぞ梅の指物するは誰  
 朧夜や顔に似合ぬ戀もあらん〔承露盤〕  
 住吉の繪巻を寫し了る春  
 春は物の句になり易し古短冊〔承露盤〕  
 山の上に敵の赤旗霞みけり



木瓜咲くや漱石拙を守るべく〔承露盤〕  
 瀧に乙鳥突き當らんとしては返る〔承露盤〕  
 なある程是は大きな涅槃像  
 春の夜を兼好緇衣に恨みあり  
 暖に乗じ一舉蟲をみなごろしにす  
 達磨傲然として風に嘯く風巾  
 疝は御大事餘寒烈しく候へば  
 董程な小さき人に生れたし〔承露盤〕  
 前垂の赤きに包む土筆かな〔承露盤〕  
 水に映る藤紫に鯉緋なり  
 漱石

正岡子規へ送りたる句稿 その二十四 四月十八日

古往今來切つて血の出ぬ海鼠かな  
 西函嶺を踏えて海鼠に眼鼻なし〔承露盤〕

土筆物言はすすんくとのびたり

劍 五句

春寒し墓に懸けたる季子の劍  
 抜くは長井兵助の太刀春の風  
 劍寒し鬪を排して樊噲が  
 太刀佩て戀する雛ぞむつかしき〔承露盤〕  
 浪人の刀錆びたり時鳥

泳 六句

顔黒く鉢巻赤し泳ぐ人  
 深うして渡れず余は泳がれず  
 裸體なる先生胡坐す水泳所  
 泳ぎ上り河童驚く暑かな  
 泥川に小兒つどいて泳ぎけり  
 龜なるといふが泳いできては背を曝す

字 五句



いの字よりはの字むつかし梅の花  
夏書する黄檗の僧名は即非〔承露整〕  
客に賦あり墨磨り流す月の前〔承露整〕  
巨燵にて一筆しめし参らせう  
金泥もて法華經寫す日永哉

謡 五句

春の夜を小謡はやる家中哉〔承露整〕  
隣より謡ふて來たり夏の月  
肌寒み祿を離れし謡ひ聲  
謡師の子は鼓うつ時雨かな〔承露整〕  
謡ふものは誰ぞ櫻に灯ともして〔承露整〕  
八時の廣き畑打つ一人かな〔承露整〕  
角落ちて首傾けて奈良の鹿〔承露整〕  
菜の花の中へ眞赤な大きな入日かな  
木瓜咲くや筵竹の音算木の音

若鮎の焦つてこそは上るらめ  
夥し窓春の風門春の水  
据風呂に傘さしかけて春の雨〔承露整〕  
泥海の猶しづかなり春の暮

高良山一句

石磴や曇る肥前の春の山  
松をもて圍ひし谷の櫻かな  
雨に雲に櫻濡れたり山の陰  
菜の花の遙かに黄なり筑後川〔承露整〕  
花に濡るゝ傘なき人の雨を寒み〔承露整〕  
人に逢はず雨ふる山の花盛  
筑後路や丸い山吹く春の風〔承露整〕  
山高し動ともすれば春曇る〔承露整〕  
濃かに彌生の雲の流れけり〔承露整〕  
拜殿に花吹き込むや鈴の音



金網の軸懸け替て春の風  
 留針や故郷の蝶餘所の蝶〔承露盤〕  
 しめ縄や春の水湧く水前寺  
 上畫津や青き水菜に白き蝶  
 茶種咲く小島を抱いて淺き川  
 棹さして舟押し出すや春の川  
 柳ありて白き家鴨に枝垂たり〔承露盤〕  
 就中高き櫻をくるり  
 魚は皆上らんとして春の川〔承露盤〕  
 叱正 漱石拜

正岡子規へ送りたる句稿 その二十五 五月二十八日  
 行く春を刺り落したる眉青し〔承露盤〕  
 行く春を沈香亭の牡丹哉  
 春の夜や局をさがる衣の音

憶子規一句

春雨の夜すがら物を思はする  
 埒もなく禪師肥たり更衣〔承露盤〕  
 よき人のわざとがましや更衣〔承露盤〕  
 更衣て弟の脛何ぞ太き  
 埋もれて若葉の中や水の音  
 影多き梧桐に据る床几かな  
 郭公茶の間へまかる通夜の人〔承露盤〕  
 蹴付たる離の枕や子規〔承露盤〕  
 辻君に袖牽れけり子規〔承露盤〕  
 扛げ兼て妹が手細し鮭の石  
 小賢しき犬吠付や更衣  
 七筋を心利きたる鶴匠哉  
 漢方や柑子花さく門構〔承露盤〕  
 若葉して半簾の雨に臥したる



妾宅や牡丹に會す琴の弟子  
 世はいづれ櫻欄の花さへ穂に出でつ  
 立て懸て螢這ひけり草蓐  
 若葉して縁切榎切られたる  
 でゝ蟲の角ふり立て、井戸の端  
 溜池に蛙鬪ふ卯月かな  
 虚無僧に犬吠えかゝる桐の花  
 筍や思ひがけなき垣根より  
 若竹や名も知らぬ人の墓の傍  
 若竹の夕に入て動きけり  
 鞭鳴す馬車の埃や麥の秋  
 渡らんとして谷に橋なし閑古鳥  
 折り添て文にも書かず杜若  
 八重にして芥子の赤きぞ恨みなる  
 傘さして後向なり杜若

〔承露盤〕

〔承露盤〕

蘭湯に浴すと書て詩人なり  
 すゝめたる鮮を皆迄参りたり  
 鮮桶の乾かで臭し蝸牛  
 生臭き鮮を食ふや佐野の人  
 粽食ふ夜汽車や膳所の小商人  
 蝙蝠や賊の酒呑む古箱  
 不出來なる粽と申しおこすなる  
 五月雨や小袖をほどく酒のしみ  
 五月雨の壁落しけり枕元  
 五月雨や四つ手繕ふ舊士族  
 眼を病んで灯ともさぬ夜や五月雨  
 馬の蠅牛の蠅來る宿屋かな  
 逃すまじき蚤の行衛や子規  
 蚤を逸し赤き毛布に恨みあり  
 蚊にあけて口許りなり墓の面

〔承露盤〕



鳴きもせでぐさと刺す蚊や田原坂

熊本にて一句

夏來ぬと又長鉄を弾すらく

藪近し椽の下より筍が

寐苦しき門を夜すがら水鶏かな

成道寺一句

若葉して手のひらほどの山の寺

菜種打つ向ひ合せや夫婦同志

菊池路や麥を刈るなる舊四月

麥を刈るあとを頻りに燕かな

文與可や笋を食ひ竹を畫く

五月雨の弓張らんとすればくるひたる

立て見たり寐て見たり又酒を煮たり

水攻の城落ちんとす五月雨

大手より源氏寄せたり青嵐

〔承露盤〕

〔承露盤〕

〔承露盤〕

水澗れて城將降る雲の峯

五月『めさまし草』

青葉勝に見ゆる小村の幟かな

七月『めさまし草』

槽底に魚あり沈む心太

八月一日正岡子規宛の手紙の中より

夕涼し起ち得ぬ和子を啣つらく

八月『めさまし草』

落ちて來て露になるげな天の川

八月、九月



初秋鎌倉に宿して

行燈や短かゝりし夜の影ならず

鶴ヶ岡八幡

徘徊す蓮あるをもて朝な夕な

圓覺寺

冷やかな鐘をつきけり圓覺寺

長谷

來て見れば長谷は秋風ばかりなり

歸源院即事

佛性は白き桔梗にこそあらめ

山寺に湯ざめを悔る今朝の秋

禪僧宗活に對す

其許は案山子に似たる和尚かな

九月十日熊本着

南九州に入つて柿既に熟す

九月十一日正岡子規宛の端書の中より

今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる

正岡子規へ送りたる句稿 その二十六 十月

或人につかはす 一句

樽柿の澁き昔しを忘るゝな

澁柿やあかの他人であるからは

萩に伏し薄にみだれ故里は 〔承露盤〕

粟折つて穂ながら呉るゝ籠の鳥

蟪蛄の何を以てか立腹す

蟬のふと鳴き出しぬ鳴きやみぬ 〔承露盤〕

うつらく聞き初めしより秋の風 〔承露盤〕

秋風や棚に上げたる古かばん 〔承露盤〕

明月や無筆なれども酒は呑む 〔承露盤〕



明月や御樂に御座る殿御達  
 明月に今年も旅で逢ひ申す〔承露盤〕  
 眞夜中は淋しからうに御月様  
 明月や拙者も無事で此通り〔承露盤〕  
 蝉よ秋ぢや鳴かうが鳴くまいが〔承露盤〕  
 秋の暮一人旅とて嫌はる〔承露盤〕  
 梁上の君子と語る夜寒かな〔承露盤〕  
 これ見よと云はぬ許りに月が出る  
 朝寒の冷水浴を難んずる〔承露盤〕  
 妻を遺して獨り肥後に下る一句  
 月に行く漱石妻を忘れたり  
 朝寒の膳に向へば焦げし飯  
 長き夜を平氣な人と合宿す  
 うそ寒み大めしを食ふ旅客あり  
 吏と農と夜寒の汽車に語るらく

月さして風呂場へ出たり平家蟹〔承露盤〕  
 恐るく芭蕉に乗つて雨蛙〔承露盤〕  
 某は案山子にて候雀どの〔承露盤〕  
 鶏頭の陽氣に秋を觀すらん〔承露盤〕  
 明月に夜逃せうとて延ばしたる  
 鳴子引くは只退屈で困る故  
 芭蕉ならん思ひがけなく戸を打つは  
 刺さずんば已ますと誓ふ秋の蚊や  
 秋の蚊と夢油斷ばしし給ふな  
 嫁し去つてなれぬ砧に急がしき  
 長き夜を煎餅につく鼠かな〔承露盤〕  
 野分して蟪蛄を窓に吹き入る〔承露盤〕  
 豆柿の小さくとも數で勝つ氣よな  
 北側を稻妻焼くや黒き雲〔承露盤〕  
 餘念なくぶらさがるなり烏瓜



蛛落ちて疊に音す秋の灯細し

漱石拜

正岡子規へ送りたる句稿 その二十七 十二月  
朧枝子来る

淋しくば鳴子をならし聞かせうか

有感

ある時は新酒に酔て悔多き〔承露盤〕

紫影に別るゝ時一句

菊の頃なれば歸りの急がれて  
傘を菊にさしたり新屋敷  
去りとはむしりもならず赤き菊  
一東の韻に時雨るゝ愚庵かな  
凧や鐘をつくなら踏む張つて  
二三片山茶花散りぬ床の上

早鐘の恐ろしかりし木の葉哉  
片折戸菊押し倒し開きけり〔承露盤〕  
栗の後に刈り残されて菊孤く  
初時雨吾に持病の疝氣あり  
柿落ちてうたゝ短かき日となりぬ〔承露盤〕  
提灯の根岸に歸る時雨かな  
曉の水仙に對し川手水  
蒲團着て踏張る夢の暖き  
寒を出てあられしたゝか降る事よ  
熊笹に兎飛び込む霰哉  
病あり二日を籠る置炬燵  
水仙の花鼻かぜの枕元  
漱石拜

正岡家所藏『承露盤』の中より 十六句



蛭ありて黄之水經注に曰く  
土用にして灸を据べく頭痛あり  
樂に更けて短き夜之公使館  
撫子に病閑ありて水くれぬ  
夕立や犇く市の十万家  
寂として椽に鉄と牡丹哉

鶴 岡一句

白蓮にいやしからざる朱欄哉  
來る秋のことわりもなく蚊帳の中  
晴明の頭の上や星の戀

留 別一句

朝寒み夜寒みひとり行く旅ぞ  
砂山に芒ばかりの野分哉  
船出るとのゝしる聲す深き霧  
朝懸や霧の中より越後勢

山里や一斗の粟に貧ならず  
漕ぎ入れん初汐よする龍が窟  
藥掘昔不老の願ひあり

明治三十年頃

竿になれ鉤になれ此處へおろせ雁  
鳴き立てゝつくく法師死ぬる日ぞ  
濱に住んで朝顔小き恨みかな



明治三十一年

正岡子規へ送りたる句稿 その二十八 一月六日

行く年や猫うづくまる膝の上  
焚かんとす枯葉にまじる霰哉  
切口の白き芭蕉に氷りつく  
家を出て師走の雨に合羽哉  
何をつゝき鴉あつまる冬の鳥  
降りやんで蜜柑まだらに雪の舟  
此炭の唧つべき世をいぶるかな  
かんでらや師走の宿に寐つかれず  
温泉の門に師走の熟柿かな  
温泉の山や蜜柑の山の南側  
海近し寐鴨をうちし筒の音

天草の後ろに寒き入日かな  
日に映すほうけし薄枯ながら  
旅にして申譯なく暮るゝ年  
風の沖へとあるゝ筑紫潟  
うき除夜を壁に向へば影法師  
床の上に菊枯れながら明の春  
元日の山を後ろに清き温泉  
酒を呼んで酔はず明けたり今朝の春  
稍遅し山を背にして初日影  
馳け上る松の小山や初日の出  
甘からぬ屠蘇や旅なる酔心地  
小天に春を迎へて  
温泉や水滑かに去年の垢  
大喪中一句  
此春を御慶もいはで雪多し



正月の男といはれ拙に處す  
色々の雲の中より初日出

賀虚子新婚一句

初鴉東の方を新枕

僧歸る竹の裡こそ寒からめ

桐かれて洩れ來る月の影多し

歸庵

一尺の梅を座右に置く机

正

愚陀佛庵

梅ちつてそゞろなつかしむ新俳句

三月二十一日高濱虚子宛の手紙の中より

正岡子規へ送りたる句稿 その二十九 五月頃

春雨の隣の琴は六段か

瓢かけてからくと鳴る春の風

鳥籠を柳にかけて狭き庭

來よといふに來らずやみし櫻かな

三條の上で逢ひけり朧月

片寄する琴に落ちけり朧月

〔承露盤〕

こぬ殿に月朧之高き樓

行きくつて朧に笙を吹く別れ

〔承露盤〕

搦手やはね橋下す朧月

〔承露盤〕

有感

有耶無耶の柳近頃緑之

〔承露盤〕

白川

颯と打つ夜網の音や春の川

本妙寺

永き日を太鼓打つ手のゆるむこ

水前寺



湧くからに流るゝからに春の水

藤崎八幡

彌宜の子の烏帽子つけたり藤の花〔承露堂〕

明午橋

春の夜のしば笛を吹く書生哉

花岡山

海を見て十歩に足らぬ烟を打つ

拜聖庵

花一木穴賢しと見上たる

其他

佛かく宅磨が家や梅の花

鶴を切る板は五尺の春の椽

思ひ切つて五分に刈りたる拾かな

正岡子規へ送りたる句稿 その三十 九月二十八日

馬車には乗るものと聞きしに同行四人 一句

小き馬車に積み込まれけり稻の花

夕暮の秋海棠に蝶うとし

離れては寄りては菊の蝶一つ

枚をふくむ三百人や秋の霜

胡兒驕つて驚きやすし雁の聲

碓うつ真夜中頃に句を得たり

踊りけり拍子をとりにて月ながら

茶布巾の黄はさめ易き秋となる

長かれと夜すがら語る二人かな

子は雀身は蛤のうきわかかれ

相撲取の屈托顔や午の雨

言者不知者不言 一句

ものいはぬ案山子に鳥の近寄らず

病む頃を雁來紅に雨多し



寺借りて二十日になりぬ鶏頭花  
恩給に事を缺かや種瓢  
早稲晩稲花なら見せう萩紫苑  
生垣の丈かり揃へ晴るゝ秋  
秋寒し此頃あるゝ海の色  
夜相撲やかんてらの灯をふきつける  
聖像をかけて  
菅公に梅さかされば蘭の花

正岡子規へ送りたる句稿 その三十一 十月十六日  
立枯の唐黍鳴つて物憂かり  
逢ふ戀の打たでやみけり小夜砧  
蝶來りしほらしき名の江戸菊に  
塩焼や鮎に濼びたる好みあり  
一株の芒動くや鉢の中  
〔承露盤〕

乾鮭のからついてゐる柱かな  
〔承露盤〕  
病妻の間に灯ともし暮るゝ秋  
〔承露盤〕  
かしこまりて憐れや秋の膝頭  
かしこみて易を読む儒の夜を長み  
長き夜や土瓶をしたむ臺所  
張まぜの屏風になくや蟋蟀  
〔承露盤〕  
うそ寒み油ぎつたる枕紙  
病むからに行燈の華の夜を長み  
〔承露盤〕  
秋の暮野狐精來り見えて曰く  
白封に訃音と書いて漸寒し  
落ち合ひて新酒に名乗る醫者易者  
〔承露盤〕  
憂あり新酒の酔に托すべく  
〔承露盤〕  
苦もりて夢こそ覺むれ萩の聲  
秋の日のつれなく見えし別かな  
〔承露盤〕  
行く秋の關廟の香爐烟なし



唐黍や兵を伏せたる氣合あり

玉斧

漱石拜

十一月『反省雜誌』五句

朝寒の楊子使ふや流し元  
駕昇の京へと急ぐ女郎花  
柳散りくつゝ細る戀  
病癒えず蹲る夜の野分かな  
つるんだる蜻蛉飛ぶなり水の上

正岡家所藏『承露盤』の中より六句

菊作る奴がわざの接木かな  
ゆゝしくも合羽に包むつぎ木かな  
能もなき遊柿共や門の内  
朝顔や手拭懸に這ひ上る  
むら雀粟の穂による亂れかな



明治三十二年

正岡子規へ送りたる句稿 その三十二 一月

元日屠蘇を酌んで家を出づ

金泥の鶴や朱塗の屠蘇の盃  
宇佐に行くや佳き日を選む初曆

宰府より博多へ歸る人にて汽車には坐すべ

き場所もなし

梅の神に如何なる戀や祈るらん

小倉

うつくしき蟹の頭や春の鯛

正月二日宇佐に入る新曆なればにや門松た

てたる家もなし

蕭條たる古驛に入るや春の夕

宇佐八幡にて

兀として鳥居立ちけり冬木立  
神苑に鶴放ちけり梅の花  
ぬかづいて曰く正月二日なり  
松の苔鶴瘦せながら神の春  
南無弓矢八幡殿に御慶かな  
神かけて祈る戀なし宇佐の春

橋を吳橋といひ川を寄藻川といふ 一句

吳橋や若菜を洗ふ寄藻川  
灰色の空低れかゝる枯野哉  
無提灯で枯野を通る寒哉  
石標や残る一株の枯芒  
枯芒北に向つて靡きけり  
遠く見る枯野の中の烟かな  
暗がりに雑巾を踏む寒哉



冬ざれや貉をつるす軒の下  
 羅漢寺にて  
 凧や岩に取りつく羅漢路  
 巖窟の羅漢共こそ寒からめ  
 釣鐘に雲氷るべく山高し  
 凧の鐘樓危ふし巖の角  
 梯して上る大磐石の氷かな  
 巖頭に本堂くらき寒かな  
 絶壁に木枯あたるひゞきかな  
 巖端に廊あり藁を積むこと丈餘雜僧一人其  
 端に坐して凧の吹くたびに千丈の崖下に落  
 ちんとす其居の危きを告ぐるに平然として  
 曰くいのは一つぢやあきらめて居ります  
 ると勿然鳥巢和尚の故事を憶起して  
 雜僧の只凧呂吹と答へけり

參詣路の入口にて道端の笹の葉を結びて登  
 るが例なり極樂の縁を結ぶ爲めなりとかや  
 之を笹結びといふ 二句  
 かしこしや未來を霜の笹結び  
 二世かけて結ぶちぎりや雪の笹  
 口の林といふ處に宿りて  
 短かくて毛布つき足す蒲團かな  
 泊り合す旅商人の寒がるよ  
 寐まらんとすれど衾の薄くして  
 耶馬溪にて  
 頭巾着たる獵師に逢ひぬ谷深み  
 はたと逢ふ夜興引ならん岩の角  
 谷深み杉を流すや冬の川  
 冬木流す人は猿の如くなり  
 帽頭や思ひがけなき岩の雪



石の山 風に吹かれ裸なり

溪山幾曲愈入れば愈深し

風のまがりくねつて響きけり

山は洗ひし如くにて

風の吹くべき松も生えざりき

年々や 風吹て尖る山

風の峯は 劍の如くなり

恐ろしき岩の色なり玉霰

只寒し天狭くして水青く

目ともいはず口ともいはず吹雪哉

ばりノと氷踏みけり谷の道

溪中柿坂を過ぐ

道端や氷りつきたる高筈

守實に泊りて

たまさかに据風呂焚くや冬の雨

せぐままる蒲團の中や夜もすがら

薄蒲團なえし毛脛を擦りけり

家に婦人なし之を問へば先つ頃身まかりて

翌は三十五日なりといふ庭前の墓標行客の

憐をひきてカンテラの灯の愈陰氣なり

僧に似たるが宿り合せぬ雪今宵

峠を踏えて豊後日田に下る

雪ちら／＼峠にかゝる合羽かな

拂へども／＼わが袖の雪

かたかりき鞋喰ひ込む足袋の股

隧道の口に大なる氷柱かな

吹きまくる雪の下なり日田の町

炭を積む馬の脊に降る雪まだら

峠を下る時馬に蹴られて雪の中に倒れけれ

ば



漸くに又起きあがる吹雪かな

日田にて五岳を憶ひ

詩僧死して只風の里なりき

筑後川の上流を下る

蓆帆の早瀬を上る霞かな

奔湍に霞ふり込む根笹かな

つるぎ洗ふ武夫もなし玉霞

新道は一直線の寒さかな

棒鼻より三里と答ふ吹雪哉

吉井に泊りて

なつかしむ衾に聞くや馬の鈴

追分とかいふ處にて車夫共の親方乗つて行

かん喃といふがあまり可笑しかりければ

親方と呼びかけられじ毛布哉

其他少々

餅搗や明星光る杵の先

行く年の左したる思慮もなかりけり〔承露盤〕

染め直す古服もなし年の暮

やかましき姑健なり年の暮

ニツケルの時計とまりぬ寒き夜半

元日の富士に逢ひけり馬の上

蓬萊に初日さし込む書院哉

光琳の屏風に咲くや福壽草

眸に入る富士大いなり春の樓

正

つまらぬ句許りに候然し紀行の代りとして御覽被下度翼くは大兄病中烟霞

の僻萬分の一を慰するに足らんか

手帳の中より二十七句 一月頃

石打てばかららんと鳴る氷哉



樂しんで蓋をあくれば干鱈哉  
乾鮭や薄く切れとの仰せなり  
春風に祖師西來の意あるべし  
禪僧に旛動きけり春の風  
佛畫く殿司の窓や梅の花  
郎を待つ待合茶屋の柳かな  
鞭つて牛動かざる日永かな  
わが歌の胡弓にのらぬ臙かな  
煩惱の臙に似たる夜もありき  
吾折々死なんと思ふ臙かな  
春此頃化石せんと願あり  
招かれて隣に更けし歌留多哉  
追羽子や君稚兒髻の黒眼勝  
毫碌と名のつく老の頭巾かな  
筋違に葱を切るなり都振

〔第十五卷二五七頁参照〕

玉葱の煮えざるを煮つ火鉢哉  
湯豆腐に霰飛び込む床几哉  
立ん坊の地團太を踏む寒かな  
べんべらを一枚着たる寒さかな  
ある時は鉢叩かうと思ひけり  
寄り添へば冷たき瀬戸の火鉢かな  
清巖曰鑊湯有冷處 一句  
雪を煮て煮立つ音の涼しさよ  
舉して曰く可なく不可なし蕪汁  
善か悪か風呂吹を喰つて合點せよ  
何の故に恐縮したる生海鼠哉  
老聃のうとき耳ほる火燧かな

正岡子規へ送らる句稿 その三十三 二月  
梅花百五句



夫子貧に梅花書屋の粥薄し  
手を入る、水餅白し納屋の梅  
馬の尻に尾して下るや岨の梅  
ある程の梅に名なきはなかり臭  
奈良漬に梅に其香をなつかしむ  
相傳の金創膏や梅の花  
たのもしき梅の足利文庫かな  
抱一は發句も讀んで梅の花  
明た口に團子賜る梅見かな  
いざ梅見合點と端折る衣の裾  
夜汽車より白きを梅と推しけり  
死して名なき人のみ住んで梅の花  
法橋を給はる梅の主人かな  
玉蘭と大雅と語る梅の花  
村長の上座につくや床の梅

梅の小路練香ひさぐ翁かな  
寄合や少し後れて梅の椽  
裏門や醋藏に近き梅赤し  
一つ紋の羽織はいやし梅の花  
白梅や易を講ずる蘇東坡服  
蒟蒻に梅を踏み込む男かな  
梅の花千家の會に参りけり  
碧玉の茶碗に梅の落花かな  
粗略ならぬ服紗さばきや梅の主  
日當りや刀を拭ふ梅の主  
祐筆の大師流なり梅の花  
日をうけぬ梅の景色や楞伽窟  
とく起て味噌する梅の隣かな  
梅の花貧乏神の祟りけり  
駒犬の怒つて居るや梅の花



笠竹に梅ちりかゝる社頭哉  
一齋の小鼻動くよ梅花餅  
封切れば月が瀬の梅二三片  
ものいはす童子遠くの梅を指す  
寒徹骨梅を娶ると夢みけり  
驢に乗るは東坡にやあらん雪の梅  
梅の詩を得たりと叩く月の門  
黄昏の梅に立ちけり繪師の妻  
髣髴と日暮れて入りぬ梅の村  
梅散るや源太の簾はなやかに  
月に望む麓の村の梅白し  
瑠璃色の空を控へて岡の梅  
落梅花水車の門を流れけり  
梅の下に横割る翁の面黄く  
妓を拉す二重廻しや梅屋敷

曉の梅に下りて嗽ぐ  
梅の花琴を抱いてあちこちす  
さら／＼と衣を鳴らして梅見哉  
佩環の鏘然として梅白し  
憂と鳴て鶴飛び去りぬ闇の梅  
眠らざる僧の嚏や夜半の梅  
尺八のはたとやみけり梅の門  
宣徳の香爐にちるや瓶の梅  
古銅瓶に疎らな梅を活けてけり  
鐵筆や水晶刻む窓の梅  
墨の香や奈良の都の古梅園  
梅の宿残月硯を藏しけり  
昌打の梅を繞ぐつて動きけり  
縁日の梅窮屈に咲きにけり  
梅の香や茶晶つゞき爪上り



灯もつけず雨戸も引かず梅の花  
 梅林や角巾黄なる賣茶翁  
 上り汽車の箱根を出て梅白し  
 信偏な梅を畫くや謝春星  
 雪隠の壁に上るや梅の影  
 道服と吾妻コートの梅見哉  
 女俱して舟を上るや梅屋敷  
 梅の寺麓の人語聞ゆなり  
 梅の奥に誰やら住んで幽かな灯  
 圓遊の鼻ばかりなり梅屋敷  
 梅の中に且たのもしや梭の音  
 清げなる官司の面や梅の花  
 月升つて枕に落ちぬ梅の影  
 相逢ふて語らで過ぎぬ梅の下  
 昵懇な和尚訪ひよる梅の坊

月の梅貴とき狐裘着たりけり  
 京音の紅梅ありやと尋ねけり  
 紅梅に艶なる女主人かな  
 紅梅や物の化の住む古館  
 梅紅ひめかけの歌に咏まれけり  
 いち早く紅梅咲きぬ下屋敷  
 紅梅や姉妹の振る采の筒  
 長と張つて半と出でけり梅の宿  
 俗俳や床屋の卓に奇なる梅  
 徂徠其角並んで住めり梅の花  
 盆梅の一尺にして偃蹇す  
 雲を呼ぶ座右の梅や列仙傳  
 紅梅や文箱差出す高蒔繪  
 藪の梅危く咲きぬ二三輪  
 無作法にぬつと出けり崖の梅



梅活けて古道顔色を照らす哉  
潺湲の水挾む古梅かな  
手桶さげて谷に下るや梅の花  
寒梅に磬を打つなり月桂寺  
梅遠近そゞろあるきす昨日今日  
月升つて再び梅に徘徊す  
糸印の讀み難きを愛す梅の翁  
鐵幹や曉星を點す居士の梅  
梅一株竹三竿の住居かな  
梅に對す和靖の髭の白きかな  
琴に打つ斧の響や梅の花  
槎牙として素琴を壓す梅の影  
朱を點す三昧集や梅の花  
梅の精は美人にて松の精は翁  
一輪を雪中梅と名付けけり

大政

漱石稿

手帳の中より 十六句 春—初夏頃

靴足袋のあみかけてある火鉢哉  
ごとんと鳴る鐘をつきけり春の暮  
爐塞いで山に入るべき日を思ふ  
白き蝶をふと見染めけり黄なる蝶  
小雀の餌や喰ふ黄なる口あけて  
梅の花青磁の瓶を乞ひ得たり  
郎去つて柳空しく緑なり  
行春や紅さめし衣の裏  
紫の幕をたゝむや花の山  
花の寺黒き佛の尊さよ  
僧か俗か庵を這入れば木瓜の花  
其愚には及ぶべからず木瓜の花

句俳



寺町や土塀の隙の木瓜の花  
棄駝呼んで突ばひ据ぬ木瓜の花  
木瓜の花の役にも立たぬ實となりぬ  
若葉して籠り勝なる書齋かな

正岡子規へ送りたる句稿 その三十四 九月五日

馬渡す舟を呼びけり黍の間  
堅き梨に鈍き刃物を添てけり  
馬の子と牛の子と居る野菊かな

戸下温泉

温泉湧く谷の底より初嵐  
重ぬべき單衣も持たず肌寒し  
谷底の湯槽を出るやうそ寒み  
山里や今宵秋立つ水の音  
鶏頭の色づかであり温泉の流

草山に馬放ちけり秋の空  
女郎花馬糞についで上りけり  
女郎花土橋を二つ渡りけり

内牧温泉

圍ひあらで湯槽に逼る狭霧かな  
湯槽から四方を見るや稻の花  
遣水の音たのもしや女郎花  
歸らんとして歸らぬ様や濡燕  
雪隠の窓から見るや秋の山  
北側は杉の木立や秋の山  
終日や尾の上離れぬ秋の雲  
蓼瘦せて辛くもあらず温泉の流  
白萩の露をこぼすや温泉の流  
草刈の籃の中より野菊かな  
白露や研ぎすましたる鎌の色



葉鶏頭團子の串を削りけり  
秋の川眞白な石を拾ひけり  
秋雨や杉の枯葉をくべる音  
秋雨や蕎麥をゆでたる湯の臭ひ

阿蘇神社

朝寒み白木の宮に詣でけり  
秋風や梵字を刻す五輪塔  
鳥も飛ばず二百十日の鳴子かな

阿蘇の山中にて道を失ひ終日あらぬ方にさ

まよふ 二句

灰に濡れて立つや薄と萩の中  
行けど萩行けど薄の原廣し

立野といふ所にて馬車宿に泊る 一句

語り出す祭文は何宵の秋  
野菊一輪手帳の中に挟みけり

路岐して何れか是なるわれもかう  
七夕の女竹を伐るや裏の藪  
顔洗ふ盥に立つや秋の影  
柄杓もて水瓶洗ふ音や秋  
釣瓶きれて井戸を覗くや今朝の秋  
秋立つや眼鏡して見る三世相  
喪を秘して軍を返すや星月夜  
秋暑し癒なんとして胃の病

祝車百合發刊 一句

聞かばやと思ふ砧を打ち出しぬ  
秋茄子髭ある人に嫁ぎけり  
湖を前に關所の秋早し  
初秋の隣に住むや池の坊  
荒壁に軸落ちつかず秋の風  
唐茄子の蔓の長さよ隣から



端居して秋近き夜や空を見る  
顔にふるゝ芭蕉涼しや籐の寝椅子

寅彦桂濱の石數十顆を送る

涼しさや石握り見る掌

送別

時くれば燕もやがて歸るなり

秋立つや萩のうねりのやゝ長く

正岡子規へ送りたる句稿 その三十五 十月十七日

熊本高等學校秋季雜咏

學校

いかめしき門を這入れば蕎麥の花  
粟みのる畠を借して敷地なり

運動場

松を出てまばゆくぞある露の原

圖書館

韋編斷えて夜寒の倉に束ねたる

秋はふみ吾に天下の志

習學寮

頓首して新酒門内に許されず

朝寒と申し襦袢の贈物

瑞邦館

孔孟の道貧ならず稲の花

古ぼけし油繪をかけ秋の蝶

倫理講話

赤き物少しは參れ蕃椒

かしこまる膝のあたりやそゞる寒

教室



朝寒の顔を揃へし机かな  
先生の疎髯を吹くや秋の風

植物園

本名は頰とわからず草の花  
苔青く末枯るゝべきものもなし

物理室

南窓に寫眞を焼くや赤蜻蛉  
暗室や心得たりときりぎりす

化学室

化学とは花火を造る術ならん  
玻璃瓶に糸瓜の水や二升程

動物室

剝製の鶉鳴かなくに晝淋し  
魚も祭らず獺老いて秋の風

食堂

樊噲や鬪を排して茸の飯  
大食を上座に栗の飯黄なり

演説會

瓜西瓜富婁那ならぬはなかりけり  
就中うましと思ふ柿と栗

擊劍會

稻妻の目にも留らぬ勝負哉  
容赦なく瓢を叩く糸瓜かな

柔道試合

轉けし芋の鳥渡起き直る健氣さよ  
靡けども芒を倒し能はざる

正

漱石拜

手帳の中より 十三句  
見るからに涼しき宿や谷の底



むつとして口を開かぬ桔梗かな  
さら／＼と護謨の合羽に秋の雨  
澁柿や長者と見えて岡の家  
門前に琴弾く家や菊の寺  
時雨るゝや足場朽ちたる堂の漏  
釣鐘をすかして見るや秋の海  
菊に猫沈南蘋を招きけり  
部屋住の棒使ひ居る月夜かな

叢中に雀の死骸を拾ひ得て之を白菊の下に

葬る 一句

蛤とならざるをいたみ菊の露  
神垣や紅葉を翳す巫女の袖  
火燧して得たる將棋の詰手哉  
自轉車を輪に乗る馬場の柳かな

十二月十一日高濱虚子宛の手紙の中より 四句

横顔の歌舞伎に似たる火鉢哉  
炭團いけて雪隠詰の工夫哉  
御家人の安火を抱くや後風土記  
追分で引き剝がれたる寒かな

月日不詳

決闘や町をはなれて星月夜

〔長女出生〕

安々と海鼠の如き子を生めり

明治三十二年頃

時雨では化る文福茶釜かな



寒菊や京の茶を賣る夫婦もの  
茶の會に客の揃はぬ時雨哉  
山茶花や亭をめぐりて小道あり  
茶の花や長屋も持ちて淨土寺  
小春日や茶室を開き南向  
水仙や髯たくはへて賣茶翁

明治三十三年

北千反畑に轉居して四句 四月

菜の花の隣もありて竹の垣  
鶯も柳も青き住居かな  
新(後)き疊もに寐たり宵の春  
春の雨鍋と釜とを運びけり

折釘に掛けし春著や五つ紋

卒業を祝して 手塚光貴宛

ひとり咲いて朝日に匂ふ葵哉



紫川の東上を送る 七月四日

京に行かば寺に宿かれ時鳥

無心常覺涼靜坐自生風 原紫川のために 七月四日

ふき通す涼しき風や腹の中

秋風の一人をふくや海の上

九月六日寺田寅彦宛の端書の中より

日記の中より 渡歐 六句 九月より十一月まで

阿呆鳥熱き國へぞ参りける

稻妻の碎けて青し浪の花

雲の峰風なき海を渡りけり

赤き日の海に落込む暑かな

日は落ちて海の底より暑かな

空狭き都に住むや神無月

明治三十四年

日記の中より 倫敦 二月一日

朝 Dulwich に至り Picture Gallery を見る

此邊に至ればさすがの英國も風流閑雅の趣

なきにあらず

繪所を栗焼く人に尋ねけり

二月二十三日高濱虚子宛の端書に(倫敦)

女皇の葬式は「ハイド」公園にて見物致候

立派なものに候

白金に黄金に柩寒からず

屋根の上などに見物人が澤山居候妙ですな

風の下におろとも吹かぬなり



棺の來る時は流石に靜肅なり  
風や吹き靜まつて喪の車

熊の皮の帽を戴くは何と云ふ兵隊にや  
熊の皮の頭巾ゆゝしき警護かな

もう英國も厭になり候  
吾妹子を夢みる春の夜となりぬ

當地の芝居は中々立派に候  
滿堂の閣浮檀金や宵の春

或詩人の作を読んで非常に嬉しかりし時  
見付たる董の花や夕明り

十一月三日 於倫敦太良坊運座

礎に砂吹きあつる野分かな  
角巾を吹き落し行く野分かな  
近けば庄屋殿なり霧のあさ

天長節一句

後天後土菊匂はざる處なし  
栗を焼く伊太利人や道の傍  
栗はねて失せけるを灰に求め得ず

十一月十日 於倫敦太良坊運座

澁柿やにくき庄屋の門構  
ほきとをる下駄の齒形や霜柱  
月にうつる擬寶珠の色やとくる霜  
茶の花や智識と見えて眉深し  
茶の花や讀みさしてある楞伽經



明治三十五年

一月一日 於倫敦太良坊運座  
山賊の顔のみ明かき楮火かな

二月十六日村上露月宛の端書の中より(倫敦)

花賣に寒し眞珠の耳飾  
なつかしの紙衣もあらず行李の底  
三階に獨り寐に行く寒かな

四月中旬渡邊春溪宛の手紙の中より(倫敦)

句あるべくも花なき國に客となり

倫敦にて子規の詠を聞きて 五句 十二月一日高濱虚子宛の手紙の中より

筒袖や秋の柩にしたがはず  
手向くべき線香もなくて暮の秋  
霧黄なる市に動くや影法師  
きりくすの昔を忍び歸るべし  
招かざる薄に歸り來る人ぞ



明治三十六年

五月 於一高俳句會  
落ちし雷を鹽に伏せて鮎の石

六月 二句  
引窓をからりと空の明け易き  
ぬきんでゝ雑木の中や櫻欄の花

七月 二句  
雲の峰雷を封じて聳えけり  
船此日運河に入るや雲の峰

六月十七日井上微笑宛の手紙の中より

愚かければ獨りすゞしくおはします  
無人島の天子とならば涼しかろ 〔五二三頁参照〕  
短夜や夜討をかくるひまもなく  
更衣同心衆の十手かな  
ひとりきくや夏鶯の亂鳴  
蝙蝠や一筋町の旅藝者  
蝙蝠に近し小鍛冶が鎚の音  
市の灯に美なる蓐を見付たり  
玻璃盤に露のしたゝる蓐かな  
能もなき教師とならんあら涼し  
蚊帳青く涼しき顔にふきつける  
更衣沂に浴すべき願あり  
薔薇ちるや天似孫の詩見厭たり

七月二日菅虎雄宛の手紙の中より



樂寢晝寢われは物草太郎なり……

一 大事も糸瓜も糞もあらばこそ

明治三十六年? 『几董全集』書入れの中より

座と襟を正して見たり更衣  
手と襟を正して見たり更衣  
衣更て見たが家から出て見たが

明治三十六年? 『春夏秋冬』夏の部裏表紙に

明治三十七年

人の上春を寫すや繪そら言

一月三日橋口貫宛の自筆の繪端書に

四月二十一日野間眞綱宛の手紙の中より

鳩鳴いて烟の如き春に入る  
杏として桃花に入るや水の色

小羊物語に題す十句 五月 小松武治譯『沙翁物語集』序

一

I have full cause of weeping, but this heart

Shall break into a hundred thousand flaws

Or ere I'll weep. O fool! I shall go mad.



雨ともならず唯風の吹き募る

二

Most sore, the Goddess

On whom these airs attend! Vouchsafe my drayer

May know if you remain upon this island;

*The Tempest Act. I. Sc. II.*

見るからに涼しき島に住むからに

三

That skull had a tongue in it, and could sing once;

*Hamlet Act. V. Sc. I.*

骸骨を叩いて見たる董かな

四

Lady, by yonder blessed moon I swear,

That tips with silver all these fruit-tree tops.

*King Lear Act. II. Sc. IV.*

*Romeo and Juliet Act. II. Sc. II.*

罪もうれし二人にかゝる朧月

五

Methought I heard a voice cry 'Sleep no more!

Macbeth does murder sleep.'

*Macbeth Act. II. Sc. I.*

小夜時雨眠るなかれと鐘を撞く

六

She never told her love,

But let concealment like a worm in the bud,

Feed on her damask-cheek;

*Twelfth Night Act. II. Sc. IV.*

伏す萩の風情にそれと覺りてよ

七

Yet I'll not shed her blood;



Nor sear that whiter skin of hers than snow  
And smooth as monumental alabaster.

*Othello Act. V. Sc. II.*

白菊にしほし逡巡らふ鉄かな  
八

No, by my honour, madam, by my soul,  
No woman had it, but a civil doctor,  
Which did refuse three thousand ducats of me,  
And begg'd the ring.

*Merchant of Venice Act. V. Sc. I.*

女郎花を男郎花とや思ひけん

九

Music, awake her; strike!

'Tis time; descend; be stone no more; approach;  
Strike all that look upon with marvel,

*The Winter's Tale Act. V. Sc. III.*

人形の獨りと動く日永かな

十

I could find in my heart to disgrace my man's apparel  
And to cry like a woman;

*As You Like It Act. II. Sc. III.*

世を忍ぶ男姿や花吹雪

七月二十五日橋口貢宛の端書の中より

十錢で名畫を得たり時鳥

八月十五日橋口貢宛の自筆の繪端書の中より

秋立や斷りもなくかやの内  
ばつさりと後架の上の一葉かな  
〔六六〇頁参照〕  
〔五二五頁参照〕



秋風のしきりに吹くや古榎〔五二四頁参照〕  
九月二十九日野間眞綱宛の端書の中より

名月や杉に更けたる東大寺  
十一月六日橋口貢宛の自筆の繪端書の中より

明治三十八年

野田翁八十壽二句〔七月九日杉田作郎宛の手紙参照〕

野に下れば白髯を吹く風涼し  
夏の月眉を照して道遠し

朝貌の葉影に猫の眼玉かな  
七月二十四日鹿島松濤樓宛の繪端書に

白菊の一本折れて庵淋し  
十二月六日野間眞綱宛の端書の中より

只寒し封を開けば影法師  
鈴木子の信書を受取りて 十二月二十四日鈴木三重吉宛



明治三十九年

猶二匹ある繪端書に

寄りそへばねむりておはす春の雨

自著漾虚集を小宮氏に贈りて 五月

本來はちるべき芥子にまがきせり

五月二十七日 元祿美人の繪端書に

短冊に元祿の句や京の春

『草枕』より

九月

春風や惟然が耳に馬の鈴  
〔八月十日高瀬處子宛の繪端書参照〕

馬子唄や白髪も染めで暮るゝ春  
〔同前参照〕

花の頭を越えてかしこし馬に嫁  
〔八月十一日同前参照〕

海棠の露をふるふや物狂

〔海棠の露をふるふや朝鳥〕

花の影、女の影の朧かな

〔花の影、女の影を重ねけり〕

正一位、女に化けて朧月

〔御曹子女に化けて朧月〕

春の星を落して夜半のかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪

春や今宵歌つかまつる御姿

海棠の精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春をちこちす

思ひ切つて更け行く春の獨りかな

木蓮の花計りなる空を瞻る

春風にそら解け繻子の銘は何



祖師堂にひるの灯影や秋の雨  
かきがらを屋根にわびしや秋の雨  
暮れなんととしてほのかに蓼の花をふむ

品川一句

青樓や欄のひまより春の海  
波殿の白木めでたし菊の花  
釣鐘のうなる許りに野分かな  
反橋の小さく見ゆる芙蓉かな  
亂菊や土塀の窓の古簀垂

〔重出、六二五頁参照〕

冬籠り染井の墓地を控へけり  
十一月十七日野上豊一郎宛の端書の中より

十二月、佐藤紅綠宛

鯉汁と知らで薦めし寐覺かな

春を待つ下宿の人や書一卷  
十二月二十五日 小宮豊隆のために『鶉籠』の見返しに

俳書堂主人に子規の像を贈らる 月日不詳

うそ寒み故人の像を拜しけり



明治四十年

一月『ホトトギス』二句

御降になるらん旗の垂れ具合  
隠れ住んで此御降や世に遠し

一月一日『國民新聞』

御降に閑なる床や古法眼

二月

打つ畠に小鳥の影の屢す  
物いはぬ人と生れて打つ畠か

吾文をあつめて一冊とせる人の好意を謝し

て二句を題す

二月

長短の風になびくや花芒  
月今宵もろくの影動きけり  
月天心(後)

三月三十一日小宮豊隆宛の手紙の中より 二句 (京都)

春寒く(後の)社頭に鶴を夢みけり  
布さらす積わたるや春の風

四月『日本美術』二句

屑買の垣より呼べば蝶黄なり  
香焚けば焚かざれば又來る蝶

日記の中より 京都 四句 四月一日、二日

旅に寒し春を時雨れの京にして  
夷川通り古道具屋 一句



永き日や動き已みたる整時板  
加茂にわたす橋の多さよ春の風

北野天神

雀巢くふ石の華表や春の風

花食まば鶯の糞も赤からん

四月二十四日野上豊一郎宛の端書の中より

戀猫の眼ばかりに瘠せにけり

四月 猫の繪端書に

藤の花に古き四尺の風が吹く

藤の花の繪端書に

六月二十八日 西洋女優の繪端書に

髪に眞珠肌あらはなる涼しさよ

障る事ありて或人の招飲を辭したる手紙の  
はしに

六月

時鳥 厠半ばに出かねたり

のうぜんの花を數へて幾日影

七月末? 武定巨口宛の端書の中より

手帳の中より 五十八句

看經の下は蓮池の戦かな  
蓮剪りに行つたげな椽に僧を待つ  
蓮に添へてぬめの白さよ漾虚集  
白蓮に佛眠れり 磬落ちて  
生死事大蓮は開いて仕舞けり



ほのくと舟押し出すや蓮の中  
 簑の下に雨の蓮を藏しけり  
 田の中に一坪咲いて窓の蓮  
 夕蓮に居士渡りけり石欄干  
 明くる夜や蓮を放れて二三尺  
 蓮の欄舟に鉄を渡しけり  
 蓮の葉に鉄はとゞまりぬ鯉の色  
 石橋の穴や蓮ある向側  
 一八の家根をまはれば清水かな  
 したゞりは齒朶に飛び散る清水かな  
 寶丹のふたのみ光る清水かな  
 苔清水天下の胸を冷やしけり  
 ところてんの叩かれてゐる清水かな  
 底の石動いて見ゆる清水哉  
 二人して片足宛の清水かな

懸崖に立つ間したゞる清水哉  
 したゞりは襟をすくます清水かな  
 兩掛や關のこなたの苔清水  
 市に入る花賣愁ふ清水かな  
 樟の香や村のはづれの苔清水  
 澄みかゝる清水や小き足の跡  
 法印の法螺に蟹入る清水かな  
 追付て吾まづ掬ぶ清水かな  
 三どがさをまゝよとひたす清水かな  
 汗を吹く風は齒朶より清水かな  
 岩清水十戸の村の寛かな  
 山の温泉や欄に向へる鹿の面  
 ともし火を挑げて鹿の夜は幾時  
 芋の葉をごそつかせ去る鹿ならん  
 厠より鹿と覺しや鼻の息



山門や月に立つたる鹿の角  
岩高く見たり牡鹿の角二尺  
ひいと鳴いて岩を下るや鹿の尻  
水浅く首を伏せけり月の鹿  
かち渡る鹿や半ばに返り見る  
見下して尾上に鹿のひとりかな  
行燈に奈良の心地や鹿の聲  
そゞろ寒の温泉も三度目や鹿の聲  
蕎麥太きもてなし振や鹿の聲  
二三人砧も打ちぬ鹿の聲  
郡長を泊めてたま〜鹿の聲  
宵の鹿夜明の鹿や夢みじか  
曉や消ぬべき月に鹿あはれ  
寄りくるや豆腐の糟に奈良の鹿  
秋の空鳥海山を仰ぎけり

雲少し榛名を出でぬ秋の空  
橋立や松一筋に秋の空  
朝貌の今や咲くらん空の色  
抽んで、富士こそ見ゆれ秋の空  
鱈釣つて舟を蘆間や秋の空  
秋の空幾日仰いで京に着きぬ  
押し分くる芒の上や秋の空  
立つ秋の風にひかるよ蜘蛛の糸

八月二十日松根東洋城宛の端書に

問ふて曰く男女相惚の時什麼

漱石子筆を机頭にころがして曰く天竺に向つて去れ

讀 曰

春の水岩を抱いて流れけり  
問ふて曰く相思の女、男を捨てたる時什麼



漱石子筆を机頭に豎立して良久曰く日々是好日

讀 曰

花落ちて碎けし影と流れけり

八月二十一日松根東洋城宛の端書に

心中するも三十棒

朝 貌 や 惚 れ た 女 も 二 三 日

心中せざるも三十棒

垣 間 見 る 芙 蓉 に 露 の 傾 き ぬ

道へ道へすみやかに道へ

秋 風 や 走 狗 を 屠 る 市 の 中

手帳の中より 七句

恩 給 に 事 足 る 老 の 黄 菊 かな  
菊 に 結 へ る 四 つ 目 の 垣 も ま だ 青 し

端 溪 に 菊 一 輪 の 机 かな  
杉 垣 に 晝 を こ ぼ れ て 百 日 紅  
酸 多 き 胃 を 患 ひ て や 秋 の 雨  
大 鼓 芙 蓉 の 雨 に く れ 易 し  
後 仕 手 の 撞 木 や 秋 の 橋 掛 り

祝滿洲日々新聞創刊 十月八日森次太郎宛の手紙の中より

朝 日 の つ と 千 里 の 黍 に 上 り け り

手帳の中より 二十四句

露 け さ の 庵 を 繞 り て 芙 蓉 かな  
露 け さ の 中 に 歸 る や 小 提 灯  
か り が ね の 斜 に 渡 る 帆 綱 かな  
雁 や 渡 る 乳 玻 璃 に 細 き 灯 を 護 る  
北 窓 は 鎖 さ で 居 た り 月 の 雁



傾城に鳴くは故郷の雁ならん  
夕雁や物荷ひ行く肩の上  
灯を入るゝ軒行燈や雁低し  
帆柱をかすれて月の雁の影  
客となつて澤國に雁の鳴く事多し  
遠近の砧に雁の落るなり  
提灯に雁落つらしも闇の畦  
花びらの狂ひや菊の旗日和  
佗住居作らぬ菊を憐めり  
白菊や書院へ通る腰のもの  
草庵の垣にひまある黄菊かな  
旗一竿菊のなかなる主人かな  
草共に桔梗を垣に結ひ込みぬ  
白桔梗古き位牌にすがし  
草刈の籠の目を洩る桔梗かな

桔梗活けて寶生流の指南かな  
扶け起す萩の下より馳かな  
ふき易へて萱に聴けり秋の雨  
藁葺に移れば一夜秋の雨

十月二十九日『虞美人草』切抜帖の終に

秋の蚊の鳴かずなりたる書齋かな

手帳の中より 十一句

黒髮にあたるや妹が雪礫  
女の童に小冠者一人や雪礫  
茶の花や黄檗山を出で、里餘  
丸鬚に結ふや咲く梅紅に  
むら鴉何に集る枯野かな  
川ありて遂に渡れぬ枯野かな



法螺の音の何處より來る枯野哉  
たゝむ傘に雪の重みや湯屋の門  
吾影の吹かれて長き枯野哉  
女うつ鼓なるらし春の宵  
白絹に梅紅ゐの女院かな

十二月十六日小宮豊隆宛の端書の中より  
文債に籠る冬の日短かゝり

断片の中より  
明治四十年頃  
姫百合に筒の古びやすんど切

明治四十一年

祝傳四新婚 二月  
日毎踏む草芳しや二人連

二月二十四日高濱虚子宛の端書の中より  
鼓打ちに參る早稻田や梅の宵

手帳の中より 二十九句  
青柳擬寶珠の上に垂るゝなり  
居士が家を柳此頃藏したり  
門に立てば酒乞ふ人や帽に花  
鶯の日毎巧みに日は延びぬ  
吾に媚ぶる鶯の今日も高音かな



勅額の霞みて松の間かな  
 飯蛸の一かたまりや皿の藍  
 飯蛸や膳の前なる三保の松  
 飯蛸と侮りそ足は八つあるを  
 春の水たるむはづなを濡しけり  
 連翹に小雨来るや八つ時分  
 花曇り尾上の鐘の響かな  
 籠の鳥に餌をやる頃や水温む  
 山伏の關所へかゝる櫻哉  
 強力の笈に散る櫻かな  
 南天に寸の重みや春の雪  
 眞蒼な木賊の色や冴返る  
 そゝのかす女の眉や春淺し  
 塩辛を壺に探るや春淺し  
 名物の(後)椀(後)の(後)蜆(後)や春淺し

僧となつて鐘を撞いたら冴返る  
 穴のある錢が袂に暮の春  
 いつか溜る文殼結ふや暮の春  
 逝く春や庵主の留守の懸瓢  
 嫁がぬを日に白粉や春惜む  
 垢つきし赤き手絡や春惜む  
 春惜む人(後)に(後)し(後)き(後)りに(後)訪(後)は(後)れ(後)け(後)り  
 春色到吾家  
 おくれたる一本櫻憐なり  
 南風故國情  
 逝く春やそゞろに捨てし草の庵

『新春夏秋冬』春之部序の末に 六月  
 青柳の日に緑なり句を撰む



短夜を交す言葉もなかりけり

六月三日松根東洋城宛の手紙の中より

手帳の中より 三句 六月

天生目一治氏細君の病氣の爲めに名流俳句  
談を草して之を賣りて薬餅の料となさんと  
す。書肆余が題句あらば出版すと云ふ。天  
生目氏自ら來つて句を乞ふ。

文を賣つて薬に代ふる蚊遣哉

森次太郎氏夫人郷里にて男兒を擧ぐ一句を

祝へと云ふ

安産と涼しき風の音信哉

二人寐の蚊帳も程なく狭からん

悼 亡

六月三十日 松根東洋城より文鳥の死を報じ來れるに返して

青梅や空しき籠に雨の糸

六月三十日高濱虚子宛の端書の中より

五月雨や主と云はれし御月並

七月一日高濱虚子宛の手紙の中より

鮫鯨や小光が鍋にちんちろり

七月二十七日村上露月宛の手紙の中より

まのあたり精靈來たり筆の先

九月 猫の墓に

此の下に稻妻起る宵あらん

十月十二日野上豊一郎宛の手紙の中より



朝寒や自ら炊ぐ飯二合

たゞ一つ湯婆残りぬ室の隅  
〔十二月二十二日杉田作郎宛の手紙参照〕

二人して雑にかしづく楽しさよ  
二月? 『漱石の思ひ出』より

明治四十二年

小袖着て思ひくの春をせん  
一月一日『讀賣新聞』

とかくして鶯藪に老いにけり  
『新春夏秋冬』夏之部序の末に 二月

空間を研究せる天然居士の肖像に題す 四月七日  
空に消ゆる鐸の響や春の塔

句俳

題句  
俊寛と共に吹かるゝ千鳥かな  
五月 蓬草廬主人著『六波羅と鎌倉』見返しに



初秋の芭蕉動ききぬ枕元

『新春夏秋冬』秋之部序の末に 八月二十六日

春はものゝ句になり易し京の町 [六四三頁参照]

日記の中より 十一句 九月十二日より十月十六日まで満韓旅行

手を分つ古き都や鶉鳴く

黍行けば黍の向ふに入る日かな

草盡きて松に入りけり秋の風

馬車にて支那人の鞭の音をきく

鞭鳴らす頭の上や星月夜

水青くして平なり。赤土と青松の小きを見

なつかしき土の臭や松の秋

畫 贊 一 句

負ふ草に夕立早く逼るなり

高麗人の冠を吹くや秋の風

韓人は白し 一 句

秋の山に逢ふや白衣の人にのみ

秋晴や峯の上なる一つ松

動かさる一簣や秋の村

歸り見れば蕎麥まだ白き稻みのる

『滿韓ところぐ』より

熊岳城にて

黍遠し河原の風呂へ渡る人

『俳諧新研究』序の末に 十月

銅の牛の口より野分哉



明治四十三年

畫 贊 三月  
御堂まで一里あまりの霞かな  
イばかりの

虞美人草畫贊

七月

花びらに風薫りては散らんとす

手帳の中より 五句

八月より十月まで修善寺温泉

不圖揺れる蚊帳の釣手や今朝の秋  
秋の思池を回れば魚躍る  
官方の御立のあとや温泉の秋  
尺八を秋のすさびや欄の人  
温泉の村に弘法様の花火かな

日記の中より

九月八日より十月十日まで修善寺温泉

別るゝや夢一筋の天の川  
秋の江に打ち込む杭の響かな  
秋風や唐紅の咽喉佛  
秋晴 寐ながら空を見る。ひげをそる。一句  
秋晴に病聞あるや髭を剃る  
秋の空淺黄に澄めり杉に斧  
よすがらの雨 一句

衰に夜寒逼るや雨の音  
旅にやむ夜寒心や世は情  
一夜眠さめて枕頭に二三子を見る 一句  
蕭々の雨と聞くらん宵の伽  
秋風やひゞの入りたる胃の袋  
風流の昔戀しき紙衣かな



二兄皆早く死す。死する時一本の白髪なし。  
余の兩鬢漸く白からんとして又一縷の命を  
つなぐ 一句

生 残る 吾 耻 かしや 鬢の 霜  
立 秋の 紺 落ち 付くや 伊 豫 絳  
骨 立を 吹 けば 疾む 身に 野 分 かな  
今朝髪をけづる  
稍 寒 の 鏡 も な く に 櫛 する

昨夜主人鯛一尾を贈る。氷囊を取り去れる

祝の心にや 一句

鯛 切れば 鱗 眼を 射る 稍 寒 み  
病 む 日 又 簾の 隙より 秋の 蝶  
病 んで より 白 萩に 露の 繁く 降る 事よ  
蜻 蛉 の 夢 や 幾 度 杭 の 先  
蜻 蛉 や 留 り 損 ねて 羽 の 光

取 り 留 むる 命も 細き 薄か かな  
佛より 瘦 せて 衰れ や 曼 珠 沙 華  
虫 遠 近 病 む 夜 ぞ 静 なる 心  
餘 所 心 三 味 聞 き ぬ れば そ ゝろ 寒  
月を 互る わが いた つ き や 旅 に 菊  
起 きも ならぬ わが 枕 邊 や 菊 を 待 つ  
嬉しい。生を九仞に失つて命を一簣につな

ぎ得たるは嬉しい。 一句

生 き 返 る われ 嬉 し さよ 菊 の 秋  
た そ が れ に 参 れ と 菊 の 御 使 ひ

昨雨を聞く。夜もやまず。 一句

範 頼 の 墓 濡 る ゝら ん 秋 の 雨  
菊 作 り 門 札 見 れば 左 京 かな  
病 後 對 鏡 一 句  
洪 水 の あと に 色 な き 茄 子 かな



茶の花の中の小家や桃一本  
秋浅き樓に一人や小雨がち  
生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉  
鶴の影穂蓼に長き入日かな  
一山や秋色々の竹の色

宮本氏云ふ今二週間にて歸京し得べし。ま  
づ三十日と見れば可からんと。診断の結果  
なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同  
時に歸る。一句

古里に歸るは嬉し菊の頃  
靜なる病に秋の空晴れたり  
菊の宴に心利きたる下部かな  
午後一時楚人冠去る  
大切に秋を守れと去りにけり  
始めて床の上に取り上りて坐りたる時、今

迄横にのみ見たる世界が豎に見えて新らし  
き心地なり 二句

豎に見て事珍らしや秋の山  
坐して見る天下の秋も二た月目  
寐られぬ夜

ともし置いて室明き夜の長かな  
三人観音様より歸る。堂守から菊を乞ふて  
來る。(金をやつて) 一句

堂守に菊乞ひ得たる小錢かな  
力なや瘦せたる吾に秋の粥  
佳き竹に吾名を刻む日長かな  
見もて行く蘇氏の印譜や竹の露  
範頼の墓守も花を作るから今度はあすこで  
貰つてくるといふ。一句

秋草を仕立てつ墓を守る身かな



秋の蚊の螫さんとすなり夜明方  
 頼家のや我を螫さんと昔も 嚙栗の味  
 鮎の丈日に延びつらん病んでより  
 肌寒をかこつも君の情かな  
 桔梗 菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらし  
 り。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆装たる  
 に似たり 一句  
 貧しからぬ秋の便りや枕元  
 京に歸る日も近付いて黄菊哉  
 稻の香や月改まる病心地  
 明方戸を明ける時の心持  
 天の河消ゆるか夢の覺束な  
 始めて百舌をきく 一句  
 裏座敷林に近き百舌の聲  
 歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち

歸るべくて歸らぬ吾に月今宵  
 陰。秋かと思へば夏の末、夏の末かと思へ  
 ば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出て  
 ゐる。稻は半分黄くと。  
 雲を洩る日さしも薄き一葉哉  
 残骸猶春を盛るに堪えたりと前書して 二句  
 甦へる我は夜長に少しづゝ  
 骨の上に春滴るや粥の味  
 鶺鴒多き所なり 一句  
 鶺鴒や小松の枝に白き糞  
 寐てゐれば栗に鶺鴒の興もなく  
 氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸  
 るとざら／＼して人間の肌とは覺えず。鶏  
 の羽を引きたる如し 一句  
 栗の如き肌を切に守る身かな



冷やかな瓦を鳥の遠近す  
快晴心地よし。昨夜眠穩。

冷かや人寐静まり水の音

昨日森成さん畠山入道とかの城跡へ行つて  
歸りにあけびといふものを取つてくる。ほ  
け茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐ  
る様也うまいよし。女郎花と野菊を澤山取  
つてくる。莖黄に花青く普通にあらず。野  
菊が砂壁に映りて暗き所に星の如くに簇が  
る。二句

的礫と壁に野菊を照し見る  
鳥つゝいて半うつろのあけび哉  
朝寒や太鼓に痛き五十棒  
雨濛々。朝食。床の上に取り返りて庭を眺  
めると残紅をかすかに着けながら、百日紅

が既に黄に染つてゐる

先づ黄なる百日紅に小雨かな

昨日看護婦が裏の縁側に出てもうあの袖が  
黄になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸  
る日取なり

いたつきも久しくなりぬ袖は黄に  
足腰の立たぬ案山子を車かな  
骨許りになりて案山子の浮世かな

日記の中より  
十月十二日より十一月十五日まで胃腸病院

昨日途中にて 八句

病んで來り病んで去る吾に案山子哉  
濡るゝ松の間に蕎麥を見付たる  
藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花  
稻熟し人癒えて去るや温泉の村



柿紅葉せり纏はる 蔦の青き哉  
就中竹緑也 秋の村  
數ふべく大きな芋の葉なりけり  
新らしき命に秋の古きかな

……初め余の森成さんを迎へたる時、院長  
はわざ／＼電報で其地にて充分看護せよと  
電報をかけたなり。治療を受けた余は未だ生  
きてあり治療を命じたる人は既に死す。驚  
くべし 一句

逝く人に留まる・人に來る 雁  
雞頭に後れず 或夜月の雁  
釣台に野菊も見えぬ 桐油哉  
思ひけり 既に幾夜の蟋蟀  
病院でも朝五時頃になると太鼓の聲が聞え  
る。始めて聞いた時は恍惚のうちに修善寺

に居た様な心持がした。

過ぎし秋を夢みよと打ち覺めよとうつ

修善寺にて森成國手へ

朝寒も夜寒も人の情かな  
森成君に病氣前の寫眞を望まれて一句を題  
す

顧みる我面影やすでに秋  
曉や夢のこなたに淡き月  
ぶら下る蜘蛛の糸こそ冷やかに  
嬉しく思ふ蹴鞠の如き菊の影  
肩に來て人懐かしや赤蜻蛉  
澁柿も熟れて王維の詩集哉

晴。夜十時、三時十五分前に目醒む。兩度

共小便。二句

つく／＼と行燈の夜の長さかな



小行燈夜半の秋こそ古めけり  
一叢の薄に風の強き哉  
雨多き今年と案山子聞くからに  
柿一つ枝に残りて鳥哉

一等患者三名のうち二名死して余獨り生存す。運命の不思議な事を思ひ。上の句あり。

君が琴塵を拂へば鳴る秋か

(寅彦のグイオリンの事を考へ出して)

明けの菊色未だしき枕元  
日盛りやしばらく菊を縁のうち  
縁に上す君が遺愛の白き菊  
井戸の水汲む白菊の晨哉  
蔓で提げる目黒の菊を小鉢哉

身體を拭き爪を剪る。一句

形ばかりの浴す菊の二日哉  
三日の菊雨と變るや昨夕より

菊の鉢は夜見る方よし。一句

燭し見るは白き菊なれば明らさま  
藏澤の竹を得てより露の庵

床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る 二句

棺には菊抛げ入れよ有らん程  
有る程の菊抛げ入れよ棺の中  
ひたすらに石を除くれば春の水

『思ひ出す事など』の中より

たゞ一羽來る夜ありけり月の雁  
菊の雨われに閑ある病哉  
菊の色縁に未し此晨  
病んで夢む天の川より出水かな



風に聞け何れか先に散る木の葉  
萩に置く露の重きに病む身かな  
冷やかな脈を護りぬ夜明方  
露けさの里にて静なる病  
迎火を焚いて誰待つ紹の羽織  
朝寒や生きたる骨を動かさず  
腸に春滴るや粥の味

無花果や竿に草紙を縁の先  
屠牛場の屋根なき門や夏木立

勾欄の擬寶珠に一つ蜻蛉哉

冷かな文箱差出す蒔繪かな  
冷かな足と思ひぬ病んでより  
冷やかに觸れても見たる擬寶珠哉  
冷やかに抱いて琴の古きかな  
提灯を冷やかに提げ芒かな

白菊と黄菊と咲いて日本かな  
菊の香や幾鉢置いて南縁  
生垣の隙より菊の澁谷かな  
暖簾に藝人の名を茶屋の菊  
青山に移りていつか菊の主  
榻置いて菊あるところどころかな



明治四十三年頃

なに食はぬ和尚の顔や河豚汁  
詠曲藤戸  
浦の男に浅瀬問ひ居る臙哉

明治四十四年

一人居や思ふ事なき三ケ日

畫 贊

蝶去つて又蹲踞る小猫かな

四月

棄駝して石を除くれば春の水

鶏の尾を午頃吹くや春の風



素川兄の西行を送りて 四月  
冠せぬ男も船に春の風

八月十四日 和歌の浦にて

涼しさや蚊帳の中より和歌の浦

起きぬ間に露石去にけり今朝の秋

病中露石子の訪問を受けて逢はず後より此句を贈る 九月 大阪湯川病院

蝙蝠の宵々毎や薄き粥

九月八日寺田寅彦宛の端書の中より 大阪湯川病院

稻妻に近くて眠安からず

九月 大阪湯川病院

灯を消せば涼しき星や窓に入る

病院にて 九月十四日松根東洋城宛の端書の中より

風折々萩先づ散つて芒哉

九月二十日寺田寅彦宛の端書の中より

耳の底の腫物を打つや秋の雨  
切口に冷やかな風の厠より

九月二十五日松根東洋城宛の手紙の中より

たのまれて戒名選ぶ鶏頭哉

十月二十一日松根東洋城宛の端書の中より

抱一の芒に月の圓かなる

十一月



行く人に留まる人に歸る雁〔七五四頁参照〕

明治四十四年秋？

稻妻の宵々毎や薄き粥

明治四十五年  
大正元年

自畫贊

五月二十六日

雪の夜や佐野にて食ひし粟の飯

壁十句

六月十七日松根東洋城宛の手紙の中より

壁隣り秋稍更けしよしみの灯  
懸物の軸だけ落ちて壁の秋  
行く春や壁にかたみの水彩畫  
壁に達磨それも墨畫の芒かな  
如意拂子懸けてぞ冬を庵の壁  
錦畫や壁に寂びたる江戸の春  
鼠もや出ると夜寒に壁の穴



壁に脊を涼しからんの裸哉  
壁に映る芭蕉夢かや戦ぐ音  
壁一重隣に聴いて砧かな

夏頃

水盤に雲呼ぶ石の影すゞし

八月 鹽原にて

湯壺から首丈出せば野菊哉

自畫贊

八月

五六本なれど靡けばすゝき哉

八月 上林にて

蚊帳越しに見る山青し杉木立

奉 悼

九月八日松根東洋城宛の手紙の中より

御かくれになつたあとから鶏頭かな

奉 送

同前

殿かに松明振り行くや星月夜

九月二十八日松根東洋城宛の手紙の中より

かりそめの病なれども朝寒み

日記の中より

十月五日

車上にて「痔を切つて入院の時」の句を作る

秋風や屠られに行く牛の尻

手帳の中より 三句



杉木立寺を藏して時雨けり  
豆腐焼く串にはらく時雨哉  
琴・作る 桐の香や春の雨

大正二年

人形も馬もうごかぬ長閑さよ  
正月 畫 贊

菊一本畫いて君の佳節哉  
秋頃

四五本の竹をあつめて月夜哉  
大正三年頃 自畫贊  
萩の朔月待つ處となりけり  
自畫贊

句俳



大正三年

播州へ短冊やるや今朝の春

一月 岩崎太郎次のために

松立て、門鎖したる隠者哉

春の發句よき短冊に書いてやりぬ

一月 内田榮造のために

手帳の中より 百十四句  
冠を掛けて柳の緑哉  
鶯は隣へ逃げて藪つゞき

句俳

つれづれを琴にわびしや春の雨  
欄干に倚れば下から乙鳥哉  
我一人行く野の末や秋の空  
内陣に佛の光る寒哉  
春水や草をひたして一二寸  
繩暖簾くゞりて出れば柳哉  
橋杭に小さき渦や春の川  
同じ橋三たび渡りぬ春の宵  
蘭の香や亞字欄渡る春の風  
岡榮一郎句を索む 一句  
竹藪の青きに梅の主人哉  
茶の木二三本閑庭にちよと春日哉  
日は永し一人居に静かなる思ひ  
世に遠き心ひまある日永哉  
線香のこぼれて白き日永哉



留守居して目出度思ひ庫裏長閑  
我一人松下に寐たる日永哉  
引かゝる、護謨風船や柳の木  
門前を彼岸参りや雪駄ばき  
そゞろ歩きもはなだの裾や春の宵  
春風に吹かれ心地や温泉の戻り  
仕立もの持て行く家や雛の宵  
長閑さや垣の外行く藥賣  
竹の垣結んで春の庵哉  
玉碗に茗甘なうや梅の宿  
草双紙探す土藏や春の雨  
桶の尻干したる垣に春日哉  
誰袖や待合らしき春の雨  
錦繪に此春雨や八代目  
京樂の水注買ふや春の町

萬歳も乗りたる春の渡し哉  
春の夜や妻に教はる荻江節  
木蓮に夢の様なる小雨哉  
降るとしも見えぬに花の雫哉  
春雨や京菜の尻の濡るゝ程  
落椿重なり合ひて涅槃哉  
木蓮と覺しき花に月朧  
永き日や頼まれて留守居してゐれば  
木瓜の實や寺は黄檗僧は唐  
春寒し未だ狐の裘  
寺町や垣の隙より桃の花  
見連に捕の簪土間の春  
染物も柳も吹かれ春の風  
連翹の奥や碁を打つ石の音  
春の顔眞白に歌舞伎役者哉



小座敷の一中は誰梅に月  
花曇り御八つに食ふは團子哉  
爐塞いで窓に一鳥の影を印見する  
寺町や椿の花に春の雪  
賣茶翁花に隠るゝ身なりけり  
高き花見上げて過ぎぬ角屋敷  
塗笠に遠き河内路霞みけり  
窓に入るは目白の八つか花曇  
静かなるは春の雨にて釜の音  
驢に騎して客來る門の柳哉  
見上ぐれば坂の上なる柳哉  
經政の琵琶に御室の朧かな  
樓門に上れば帽に春の風  
千社札貼る樓門の櫻哉  
家形船着く棧橋の柳哉

芝草や陽炎ふひまを犬の夢  
早蕨の拳伸び行く日永哉  
陽炎や百歩の園に我立てり

園 中一句

ちら／＼と陽炎立ちぬ猫の塚  
紙糺つるして枝垂櫻哉  
行く春や披露待たるゝ歌の選  
眠る山眠たき窓の向ふ哉  
魚の影底にしば／＼春の水  
四つ目垣茶室も見えて辛夷哉  
祥瑞を持ってこさせ縁に辛夷哉  
如意の銘彫る僧に木瓜の盛哉  
馬を船に乗せて柳の渡哉  
田樂や花散る里に招かれて  
行春や僧都のかきし繪巻物



行春や書は道風の綾地切  
薬打てば薬に落ちくる椿哉  
静坐聴くは虚堂に春の雨の音  
良寛にまりをつかせん日永哉  
一張の琴鳴らし見る落花哉  
春の夜や金の無心に小提灯  
局に閑あり静かに下す春の石  
春深き里にて隣り梭の音  
銀屏に墨もて梅の春寒し  
三味線に冴えたる撥の春浅し  
海見ゆる高どのにして春浅し  
白き皿に繪の具を溶けば春浅し  
筍は罐詰ならん浅き春  
行く春のはたごに畫師の夫婦哉  
行く春や經納めにと殿島

行く春や知らざるひまに頬の髭  
鶯や髮剃あてゝ貰ひ居る  
活けて見る光琳の畫の椿哉  
飯食へばまぶた重たき椿哉  
行春や里へ去なす妻の駕籠  
酒の爛此頃春の寒き哉  
皓き齒に酔貝の味や春寒し  
嫁の傘傾く土手や春の風  
春惜む日ありて尼の木魚哉  
業終へぬ寫經の事や盡くる春  
春惜む茶に正客の和尚哉  
冠に花散り來る羯鼓哉  
門鎖さす王維の庵や盡くる春  
春惜む句をめぐりに作りけり  
枳殼の芽を吹く垣や春惜む



鎌倉へ下る日春の惜しき哉  
新坊主やそゞろ心に暮るゝ春  
桃の花隠れ家なるに吠ゆる犬  
草庵や蘆屋の釜に暮るゝ春  
牽舟の繩のたるみや乙鳥  
三河屋へひらりと這入る乙鳥哉  
呑口に乙鳥の糞も酒屋哉  
鍋提げて若葉の谷へ下りけり  
料理屋の塀から垂れて柳かな

十月二十日松根東洋城宛の手紙の中より 四句

酒少し徳利の底に夜寒哉  
酒少し参りて寐たる夜寒哉  
眠らざる夜半の灯や秋の雨  
電燈を二燭に易へる夜寒哉

わが犬のために 十月三十一日

秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ



大正四年

眞向に坐りて見れど猫の戀  
畫 贊 四月五日

四月 京都にて 八句

柳芽を吹いて四條のはたごかな  
見あぐれば坂の上なる柳哉  
筋遠に四條の橋や春の川  
紅梅や舞の地を弾く金之助  
木屋町に宿をとりて川向の御多佳さんに  
春の川を隔てて、男女哉

萱草の一輪咲きぬ草の中  
畫 贊

自畫贊

牡丹剪つて一草亭を待つ日哉

自畫贊

椿とも見えぬ花かな夕曇

四月十八日加賀正太郎宛の手紙の中より

寶寺の隣に住んで櫻哉

畫 贊

五月十二日

白牡丹李白が顔に崩れけり

自畫贊

十一月

竹一本葉四五枚に冬近し

靜江さんに

十二月二十六日



女の子十になりけり梅の花

自畫贊

水仙や早稲田の師走三十日

大正五年

春風や故人に贈る九花蘭

手帳の中より 十五句 春頃

白梅にしぶきかゝるや水車  
孟宗の根を行く春の筧哉  
梅早く咲いて温泉の出る小村哉  
いち早き梅を見付けぬ竹の間  
梅咲くや日の旗立つる草の戸に  
裏山に蜜柑みゆるや長者振  
温泉に信濃の客や春を待つ  
橙も黄色になりぬ温泉の流



鶯に聞き入る茶屋の床几哉  
鶯や草鞋を易ふる峠茶屋  
鶯や竹の根方に鉄の尻  
鶯や藪くゞり行く蓑一つ  
鶯を聴いてゐるなり縫箔屋  
鶯に餌をやる寮の妾かな  
温泉の里橙山の麓かな

手帳の中より 十六句 春頃

桃の花家に唐畫を藏しけり  
桃咲くやいまだに流行る漢方醫  
輿に乗るは歸化の僧らし桃の花  
町儒者の玄關構や桃の花  
かりにする寺小屋なれど梅の花  
文も候稚子に持たせて桃の花

琵琶法師召されて春の夜なりけり  
春雨や身をすり寄せて一つ傘  
鶯を飼ひて床屋の主人哉  
耳の穴堀つて貰ひぬ春の風  
嫁の里向ふに見えて春の川  
岡持の傘にあまりて春の雨  
一燈の青幾更ぞ瓶の梅  
病める人枕に倚れば瓶の梅  
梅活けて聊かなれど手習す  
桃に琴弾くは心越禪師哉

九月二日芥川龍之介宛の手紙の中より

秋立つや一卷の書の読み残し

畫 贊

九月八日